

古代手工業の歴史地理学的考察

— 窯業を中心として —

高橋 誠 一

【要約】 本稿は従来の古代歴史地理学に於て、とかく看過されがちであった手工業の地理学的説明を主眼とする。そこでまず、他の隣接諸学の研究をたどり全国に分布する古代手工業関係地名を概観した。その中で遺跡・遺物の明確な窯業遺跡について、地名と遺跡の立地を各地方の例をあげて考察した。とりわけ代表的ないわゆる大阪南部窯址群については、歴史的・自然的背景のみならず、個々の窯の時期別分布を考慮した結果、丘陵端から奥部へ移動することや、丘陵から平野部への変換線に工人集団居住地が立地したことを想定し得た。次に奈良県に於ける宮都や寺院の瓦埴焼成のための瓦窯についても同様の考察を成すと共に、北部の寺院直属の瓦屋の位置を小字名などから考えた。このように瓦の場合はその需給関係がわかるが、須恵器については明らかでない。その点にアプローチするため、X線回折法と熱ルミネッセンス法という自然科学的方法を使用し、土器の産地想定の一例として奈良県出土の須恵器の多くが大阪南部窯址群で生産されたという結論を得た。

史林 五四卷五号 一九七一年九月

はじめに

本稿は、古代手工業^①を対象にして歴史地理学的説明を指そうとするものである。従来の古代歴史地理学の主たる

関心事は帝都・国府・郡家などの政治的中心地であり、また交通路や領域・集落であった。多くの諸先学により解明されてきたこれらの問題は確かに歴史地理学を中心に成す

課題ではあった。しかし古代地域を把握するには、いわば生産の場たるものの研究も必要であることはいうまでもない。にもかかわらず、これまで扱われてきた生産の場とし

ては、耕地としての条里地割の研究以外ではその例は数少ない。条里制は農業生産の場を象徴するものであり、手工業生産の場を地理学的に追究することは殆んど成されていない現状である。古代の政治的中心地は、農業その他の諸

生産機能を前提にして存在し得た以上、土器・織物・武器などの手工業的生産機能を看過することは、非常に一面的な結論を導き出す危険を伴なう。それ故、これら手工業的生産地の考察を進めることは、古代地域を動的に理解する上で極めて重要な手懸になり得ると考える。

次にこれまでの古代歴史地理学で扱われてきた対象は、わずかに傾斜変換線付近の古墳や高地性の弥生式集落などの例を除けば、その多くはいわば平野部に立地するものであり平野周縁に広がる丘陵地帯は無視されがちであった。

しかし古代人の生活圏には周縁の丘陵地帯も種々の意味を有して含まれていたはずであり、その意味に於ても丘陵斜面の窯業地域は新しい視点を提供し得るであろう。上記の如き観点に立脚した上で、私は我が国の古墳時代から奈良時代にかけての手工業、とりわけ遺跡・遺物が明確で普遍的な窯業を中心に、その立地や工人集団の居住地あるいは生産品の移動などの検討を加えたいと思う。

I 古代手工業研究と関連地名

一 隣接分野に於ける研究

古代手工業は古代史学の重要な問題点のひとつとして多くの研究が発表されている。即ち喜田貞吉・川上多助などによって着目されて以来問題になってきた品部雑戸制の研究がそれである。大化前代の品部制と比較される令制の品部雑戸制の成立については、植松考穆・青木和夫・上田正昭・滝川政次郎の諸説^④があるが、狩野久は諸説を紹介した上で別記の内容が大宝以前に溯り得るとし、品部雑戸制の成立期としては天武・持統朝が有力であるとする見解を述べている^⑤。律令時代のこの品部雑戸制に関する研究は他にも例えば高橋富雄・福尾猛市郎・坂本太郎・太田亮^⑥など枚挙に暇がないが、特に平野邦雄は大化前代の社会組織との対比によって注目すべき成果をあげている。また品部制や品部雑戸制のみに焦点を絞らずに古代手工業を論じた研究も多く、樋口清之や遠藤元男は古代産業や職人の面から部を論じ、石母田正^⑦は分業という見地から追究している。また律令国家の成立過程や官職制度の点から論究したものである^⑧。八木充^⑨や岩橋小弥太^⑩の研究があり、喜田と同様に未解放部落史との関連に於ては渡辺実^⑪などの例を挙げることが出来る。これらの諸研究によって品部雑戸は次第に

その姿を明らかにされつつあるが、これらは大別して官衙番上型と料物貢納型にわかれる。この内、品部は常品部と借品部にわかれ、雑戸は共通の生活圏を有する雑戸村の如きものを形成していた可能性が強い^⑭。しかしこれらの村落が計画的に設立されたにせよ、彼らは手工業に従事しつつも農耕を基本としたことは林屋辰三郎^⑮によって強調されており、門脇禎二^⑯も大化前代では農業と手工業はなお共同体的生産関係のもとで全く分離せず、変質の見られるのは八世紀中葉から九世紀にかけてであるとする。従って古代に於て完全に手工業生産のみによって存立し得た集落を想定することは困難であるが、その中にも手工業的色彩の強い集落のあったことは予想し得るのであり、これについては後に詳述したい。

一方、考古学に於ても多方面から研究が成されており、とりわけ遺物の技術的検討にとどまらず古代手工業を総合的に把握した小林行雄の研究は注目される^⑰。また近年各工房址の発掘成果も明らかにされつつあり、ここでは主眼を生産遺跡におく故に、対象としては工房址・製鉄遺跡・窯業遺跡が適当であろう。土器製作の窯址については外国で

は Charles Singer^⑱らの著作や A. Lucas のエジプトの土器に関する叙述の中で、窯址と原料粘土を結びつけて考察している例が注目されるが、日本でも須恵器窯址についての研究は近年大いに発展を遂げている。中でも大川清・坂詰秀一・檜崎彰一・倉田芳郎・森浩一らは古代窯業という広い視野から論じており、窯址の形態的研究や須恵器編年にとどまらず、労働力や歴史的背景にまで及んでいる^⑳。他に埴輪製作址や古瓦窯の研究も進展しつつあるが、しかし考古学に於ける諸研究の重点は、窯址の立地した場所を他の諸要素とのまとまりの中でとらえることから多少の隔りがあるといえる。

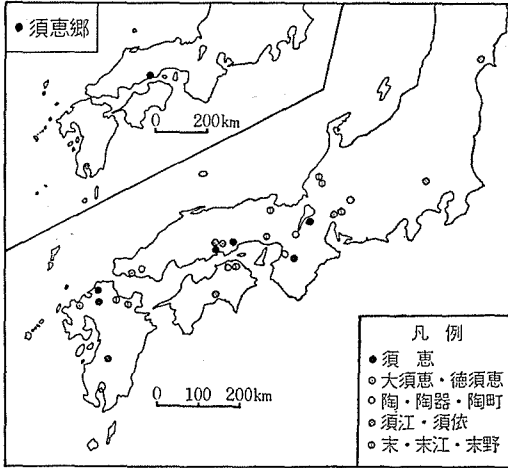
次に地名学でも品部雑戸関係地名の研究が鏡味完二^㉑や池田末則^㉒によって行われているが、後に述べるように単なる関連地名の列挙のみでは地理学の対象とは成し難い。

以上ごく簡単に隣接分野からの研究を見たが、いずれもその研究目的は工人組織や遺跡・遺物自体の解明が主であり、歴史地理学の目的とは異質である。従って私は先ず古代手工業の輪郭をつかむために、関連地名の分布を次に概観した後、先述のように遺跡・遺物が明確でしかも普遍的

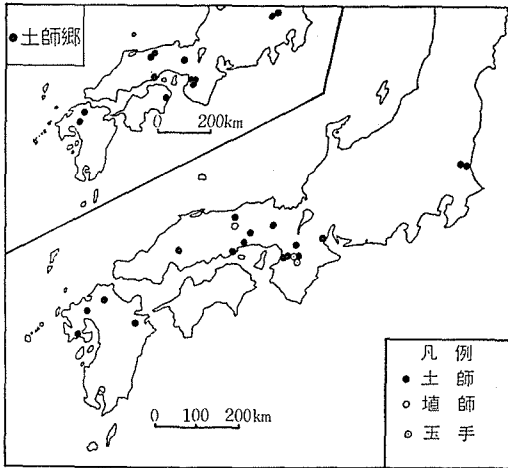
に存在した窯業について、論を歴史地理学的に展開したい。それによってともすれば無視されがちであった手工業生産地の実態解明への手懸が得られるであろう。

二 手工業関係地名の分布

手工業関係地名の分布については前述の如く地名学分野での研究がある。しかし私は改めて各種関係地名分布を確かめ、いくつかの類似した業種に分けて論じたい。



第1図 須恵地名分布図



第2図 土師地名分布図

(一) 窯業関係地名 窯業地名として私はスエ・ハジの地名に注目する。須恵(須江・須衛など)・陶・土師が代表的な例であるが、土師は陵戸を管する職能による場合が多く、性急に埴輪製作や土師器製作と結びつけることは危険である。さて須恵・陶地名は主に西日本に多く分布するが、九州では北九州に、また近畿・中国・四国では瀬戸内海沿岸に密である。一方、土師地名は茨城県を除けば西日本に集中し、近畿をはじめ中国

(特に岡山・鳥取両県)と北九州が主たる分布地であり和名抄の土師郷の分布と同様の傾向を示す。

(二) 紡織関係地名 紡織地名としては服部・錦部・呉服・錦織・倭文・綾部などをあげ得る。しかし綾部・綾戸・漢部などは単に漢氏に関係するに過ぎない場合もあり服部・

錦部・錦織を中心に考える。その分布を見ると畿内に最も密であり、次いで岡山・鳥取両県に密である。これは和名抄部名の分布ともほぼ完全に一致するが、特に姓氏録に見える大和・摂津・河内の服部連^⑧については現在も残る服部地名がその本拠として有力であり、先の岡山県については天平一一年備中国大税負死亡人帳の服部の人名がつながりをもつであろう。

今ここで天平と天平勝宝頭を中心とする正倉院の調庸絶・布を見ると、記入された国郡名から次のことがわかる。即ち畿内は大宝令により調が外国の半分の主として調錢で収め庸は免ぜられたから特別地域として除くと、他の国は①高級絹織物をおさめる畿内周辺、②下級絹織物をおさめる①と②の中間の国、③布や木綿や麻をおさめる東山道以東の国、④綿しかおさめない西海道の四郡に分け得る。これは同時に他産業をも含めた産業発達の順位を示すようであるが、先述の関係地名分布の粗密と一致する。とりわけ西海道に殆んど地名の見られないことは⑤群たることを裏書き絹織物業発達が未熟であったことを示す。対して近国・中国の範囲にはほぼ一致する関係地名密度の高い地方で

は絹織物業発達を認めるべきであろう。この場合大陸の技術導入の点から帰化人集団の居住地が密接な関係を有することは容易に推定できる^⑨。また古代に服部・錦部のいた地方は現在も機業の盛んな地であるという太田亮の見解も注目される。即ち古代纂業の盛んであった地が現在もなおその伝統を継承しているのと同様であり、原料の存在のみでなく、私は地域の有する伝統の強さにも着目したい。

(四) 武器製作関係地名 武器製作に関する地名としては弓削・矢部・矢作などがある。この内、矢部・矢作は東西日本のおもむきにも分布するのに対し、弓削地名は西日本のみ集中している。中でも前記の紡織地名の多い畿内及びその周辺と岡山県に弓削地名が多く、北九州にも一群が認められる。和名抄の弓削郷もほぼ同傾向を示す。しかしこれらの理由については更に検討が必要であり現段階では確かでない。

(四) その他の手工業関係地名 他に玉製作地としての玉作(玉造)、石棺製造などの石作、鏡鑄造の鏡作、船材産地としての船木(舟木)、鉄鉞業の穴師あるいは貨錢鑄造所としての鑄司や鑄錢司などがある。玉作については既に寺村光

晴の精密な研究中で地名・人名・式内社・和名抄郷名・遺跡が結びつけて論究されている。次に石作の地名や和名抄郷名は畿内とその周辺に見られるが、このことは石作部が姓氏録や式内社の点でも畿内とその周辺にしか見られず、しかも令制以前に職業部民としての機能を失ったことと無関係ではないであろう。鏡作や船木は地名・郷名・式内社ともに広い分布を示すが、特に岸俊男は船木地名とクスの木を結びつけた研究を発表している。さらに穴師地名については製鉄遺跡との対比の上での考察が必要であるが、本稿では一例のみをあげておく。即ち奈良県桜井市の穴師地名は式内社兵主神社などから播磨国誘磨郡兵主郷穴無里と共に製鉄遺跡と考えられる。穴師から三輪南山麓にかけては製鉄を示す三輪遺跡⁴¹があり、しかも付近には古代の海柘榴市が想定される。私は現地地の地籍図中に見える小字上市・上市口がやや東偏した上ッ道と大和川の交点にあることなどから、ここが和名抄上市郷即ち海柘榴市の地であると考えられる。それ故、この穴師・金屋の地名は製鉄遺跡としても重要であった三輪遺跡と結びつき、同時に水陸の結節点たる海柘榴市を擁していたといえる。

手工業関係地名については以上のように、極く概略を述べるに過ぎない。各地名の立地や、国府などとの有機的関係を検討する必要は勿論ある。この点に関して藤岡謙二郎が周防・参河・但馬などの国府城内の地名から、国府域にも手工業者が集められたとの推察をしているのは示唆に富むといえよう。また交通や帰化人との関係などについての研究も他日に期すこととし、本稿では中でも遺跡と結びつけて考察し得る窯業地名に焦点を絞ることにしよう。⁴⁴



第3図 海柘榴市上市郷推定図(桜井市'69年調製図)

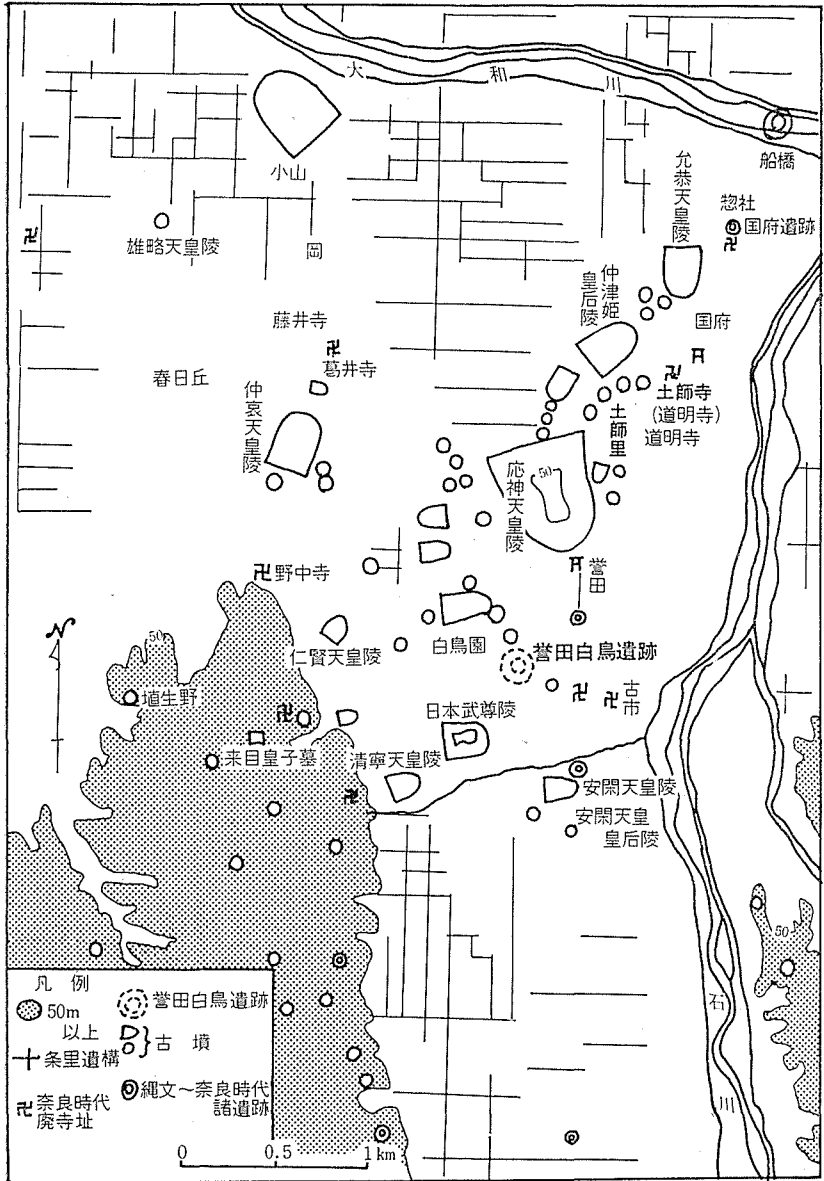
II 窯業の立地と工人集団の居住地

一 窯業地名と窯業遺跡

(一) 窯業集団としての土師氏の居住地 土師氏については

既に直木孝次郎^⑤その他の諸研究^④があり、葬礼や軍事との結びつきに於て論じられている。現在残る土師地名の他に八国にある和名抄の土師郷やその他の土師の名即ち武蔵国分寺の瓦銘の土師部・奈良時代の戸籍に見える土師の人名^⑦、いわゆる土師氏とその支族の居住地を示すが、土師器窯や埴輪窯の研究が進んでいない現在早急に直接窯業と結びつけることは危険であろう。従って私は現在の土師地名が古墳群地帯に多く見られること^⑧から、古墳経営に関係し埴輪などを製作したであろうと予察して、その例をあげたい。土師氏と土器製作を物語る史料としては、日本書紀雄略天皇一七年三月の記事の撰津・山背・伊勢・丹波・但馬・因幡の賛土師部がある。これについて津田左右吉は土師氏と賛土師連を別とし、直木は土師氏の職能分化の結果天皇家が必要な土器製作に従事したものを賛土師と呼んだとする^⑨。また土師氏とその支族が鉱物資源に関係し土師器朱塗の技

法に必要な辰砂を入手しやすかったことも窯業との結びつきを示す^⑩。あるいは土師系工人が須恵器製作技術を導入した奈良県新庄町の例もある。しかし土師氏と窯業を関連づける最も顕著な例として、私は河内の例をあげたい。即ち続日本紀桓武天皇延暦九(七九〇)年一二月の賜姓記事によって、土師氏の本流はこの時までに四支族に分かれていたことが知られる^⑪。四支族の本貫地について直木は和泉百舌鳥・大和菅原・大和秋篠寺周辺と河内古市菅田古墳群地帯^⑫をあげ、小出義治は後二者として河内道明寺(旧名土師、秋篠)と河内丹比郡土師郷をあげる^⑬。小島俊次は古墳群と対比して検討しているが、いずれにせよ河内国に土師系氏族が居住したことは疑い得ない。和名抄にも河内国志紀郡土師郷(道明寺付近)・丹比郡土師郷(日置荘付近)・和泉国大鳥郡土師郷(東百舌鳥土師付近)の名が見える。特に江談抄によればこの内で道明寺付近が本邑であったとされる^⑭。こゝは大和川・石川の左岸の丘陵地帯で土師寺(道明寺)や土師神社をはじめ、西南方の丘陵にかけて古市菅田古墳群が立地する。この古墳群の葬礼に関与した土師氏が埴輪製作にも従事したことは充分可能性が高く、近年の発掘によつ



第4図 埴輪製作址と古市菅田古墳群

て判明した埴輪製作集落としての菅田白鳥遺跡こそまさに土師氏の埴輪製作を物語るものであろう。古墳群に近接したこの埴輪製作址は運搬に不便な埴輪にとって好適な位置であった。仮にこの土師氏居住地が埴輪供給機能を有する地域を形成していたとすれば、国府遺跡から古代餌香市に続く水陸両様の交通的位置が極めて重要な役割を果たしたと考えなければならぬ。

(二) 須恵地名と須恵器窯址群

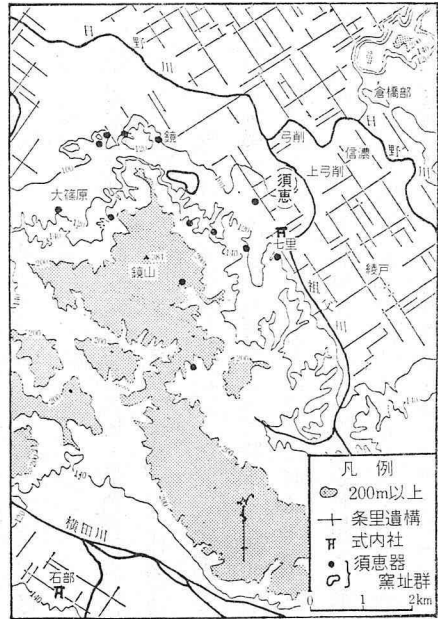
先に概観した須恵地名には須恵器窯址群と合致する例が多く見い出される。それ故、ここではいくつかの事例を提示して窯業立地と須恵工人集団居住地について論じたい。

先ず北陸道を見ると若狭国府から北川・丹後街道沿いに東行約一〇数km、若狭街道との交点に末野一・二号窯址群がある。末野には式内社須部神社があり古くは須恵野と称した。窯址群は一〇〇m等高線に沿って位置し、末野の集落はその麓に立地する。私は工人集団居住地としてこの末野を考えたが、須恵器製作と山間小平地を利用した農耕の両方が可能な位置にある。同様に福井市末でも標高約八〇mの傾斜変換線付近に末の集落があり、背後の一〇〇m

等高線沿いに末窯址群が存在する。以上の二例はあくまでも須恵器生産の普及がおくれ、長期の積雪による操業期間の制約を受けやすい專業度の低い例であるが、基本的には後述の畿内その他の窯業地域と同様の立地条件を示している。次に愛知・岐阜両県の例を見よう。東海地方では五世紀末頃から技術が普及し、平野周縁の低丘陵地帯に大規模な各窯址群を生み出す。美濃山塊から知多半島にいたる新第三紀層中の蛙目・木節などの良質陶土がその基礎になったことはいうまでもない。今対象とする尾北古窯址群は五世紀末から鎌倉中期の山茶碗窯にまで継続するが、その内の篠岡古窯址群は六〇mから一〇〇mの丘陵斜面に構築されている。最も密度の高い西斜面から標高三〇mにかけての地に上末・下末の地名が見られる。平野部には条里遺構はなく、耕地としての本格的開発は木津用水などの完成を待たねばならなかったが、式内社の分布などから古代に於ても平野周縁までの一応の開発は成されていたであろう。従って工人集団の窯業への專業度は極めて高いことは認めつつも、なお一部では農耕等に従事した可能性を否定できない。同様に美濃須衛古窯址群でも六〇mから一〇〇mの

斜面にかけての窯址群と須衛の地名がある。奈良時代には国府の官窯も設置されたことが明らかであるが、前面の平野には条里遺構と式内社が認められる。

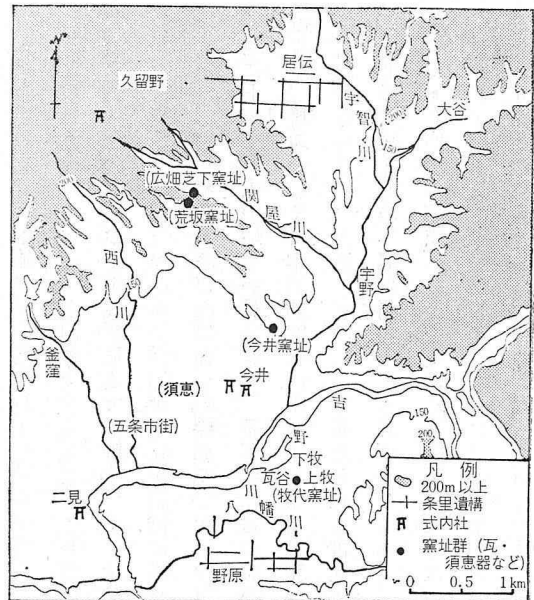
次に滋賀県近江八幡市南西の鏡山斜面に広がる窯址群についても一〇〇mから二〇〇mにかけての斜面の近江国で代表的な窯址群と、東の山脚部の須恵地名が見られる。先の例とは異なり広大な条里地域が展開し、須恵以外にも弓削・綾戸・服部・木部・兵主神社・錦織寺などがあり、多くの手工業的機能を有した地域を形成していたことがわか



第5図 滋賀県近江八幡南方の窯址群と須恵地名

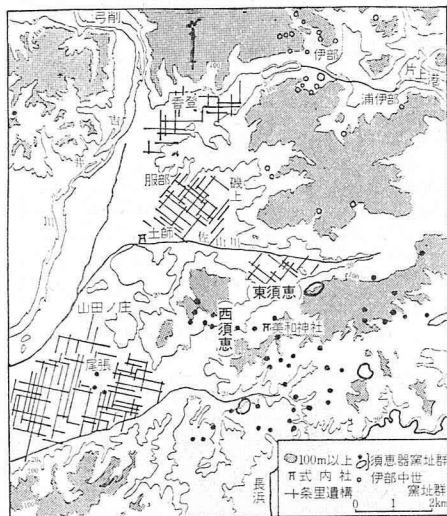
る。おそらく帰化人集団との関連が深いであろうが予察の段階を出ない。奈良県五条市でも一五〇mから二〇〇mにかけての丘陵斜面に窯址群が立地し、吉野川に臨む緩傾斜地に須恵地名が存在する。詳細は後述するが、ここでも農耕に好適とはいえぬまでも工人群が窯業の一方で農耕に従事し得たことを強調したい。

山陽道に眼を転じると、まず吉備地方で最も窯址群の密



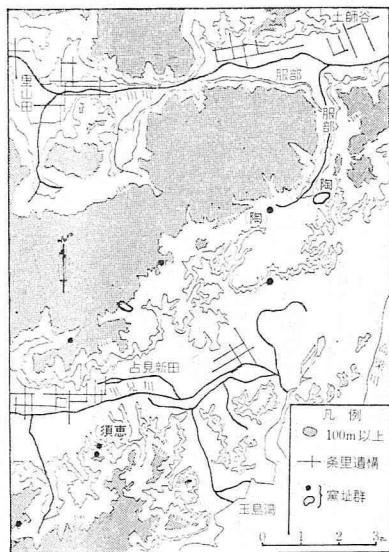
第6図 奈良県五条市の窯址群と須恵地名

集している岡山県邑久郡長船町の邑久窯址群をあげ得る。邑久窯址群は古墳時代後期から奈良時代末まで存続するが、さらに北方の備前焼を主とする伊部古窯群に引きつがれる。二〇mから一〇〇mの丘陵斜面に築窯され丘陵下には東須恵・西須恵の名が見える。付近には服部・土師の地名も分布するが、いずれにせよ大規模な窯業地域の原動力となった須恵工人群の居住地として丘陵下の須恵集落を想定することができる。次に備中でも古墳時代後期から鎌倉時代に及ぶ須恵器・瓦・須恵系の亀山焼を生産した備中陶古窯址群

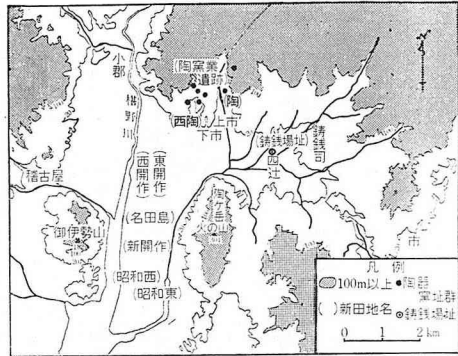


第7図 岡山県邑久窯址群と須恵地名

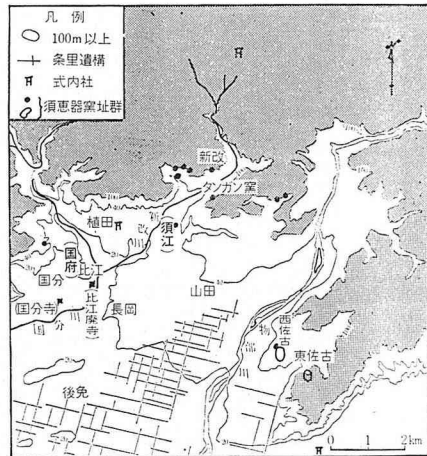
が存在する^⑧。山陽道に沿う四〇mから一〇〇mの丘陵斜面の窯址群と、糸里遺構のある平野に臨む緩傾斜地上の須恵・陶の地名がひとつのセットとして把握されることは、他の諸事例と全く同様である。ただ北東の陶と南西の須恵の両地名は、同種の工人集団でも何らかの異質な二系譜を想起させるが明らかではない。また農耕が可能であるとはいっても、新田地名が物語るように古代に広大な耕地が存在したとはいえないことも、他の多くの例と同様である。さらに山陽道では山口市陶の陶窯址群があり、二〇mから一〇〇mの斜面の窯址群と陶地名が注目される。この陶窯址



第8図 岡山県備中陶古窯址群と陶・須恵地名



第9図 山口県陶窯址群と陶地名



第10図 高知県須江窯址群と須江(スエ)地名

群は主に陶器製作の為のものであるが、先の岡山県と同じく須恵器の系譜をひくことは明らかであり、古代窯業地域が後世にまで存続した例でもある。それ故、東方の鑄銭司の鑄銭場遺跡と共にここでも他例と同じ陶集落の立地を理解せねばならない。同県内の小野田市大須恵は岬の先端にあり大須恵に接した二〇m程の丘陵には須恵器窯址群がある。しかし工人と農耕を結びつけることは、付近の耕地の殆んどが新田である故にこの場合は不適當であろう。

である。具体的にはタンガン窯址が約3km西南方の比江庵寺の瓦を製作したことで、国分川水運が運搬に利用されたであろう。即ち新改川・国分川水運を媒介として、国府や国分寺の需要を満たす目的で須恵を中心とする窯業地域が形成された。

須恵器窯址群と須恵地名が合致する諸事例としては以上でとどめるが他にも例は多い。なかでも埼玉県比企郡須江・香川県綾歌郡陶や後述の大坂府の旧陶器村などは顯著な例で、前述の一一例が必ずしも特殊な例でないことは明

最後に高知県の例をあげれば、七世紀後半に始まる土佐の窯址群は土佐山田町に集中しているが、中でも傾斜変換線に位置する須江(須恵)集落背後の一〇〇m程度の丘陵斜面上の須恵器・土師器・土鋳・瓦の製作された須江窯址群は代表的なものである。注目すべきはこの窯址群が土佐国府と密接な関係を有していたと考えられること

らかである^⑩。以上の諸事例を検討すると、まず自然的条件の共通性が理解される。即ち須恵器窯址群の構築された地は登窯構築に適した比高約一〇〇m以内の丘陵斜面であり、愛知県その他でも証明される如く良質粘土の得やすい地を志向して立地する^⑪。丘陵斜面であることは火もちのよい松をはじめ薪炭にも恵まれ、池や谷の水をも得やすかったことを示す。これらの窯業地域の多くが、古墳時代以来鎌倉時代にも命脈を保ち、さらには現在もなお窯業地域としての伝統を保持していることは、上記の恵まれた自然的条件が大きな要因になっていると考える。また製品運搬のための河川や主要交通路の交通的位置に恵まれていることも共通的特徴であろう。

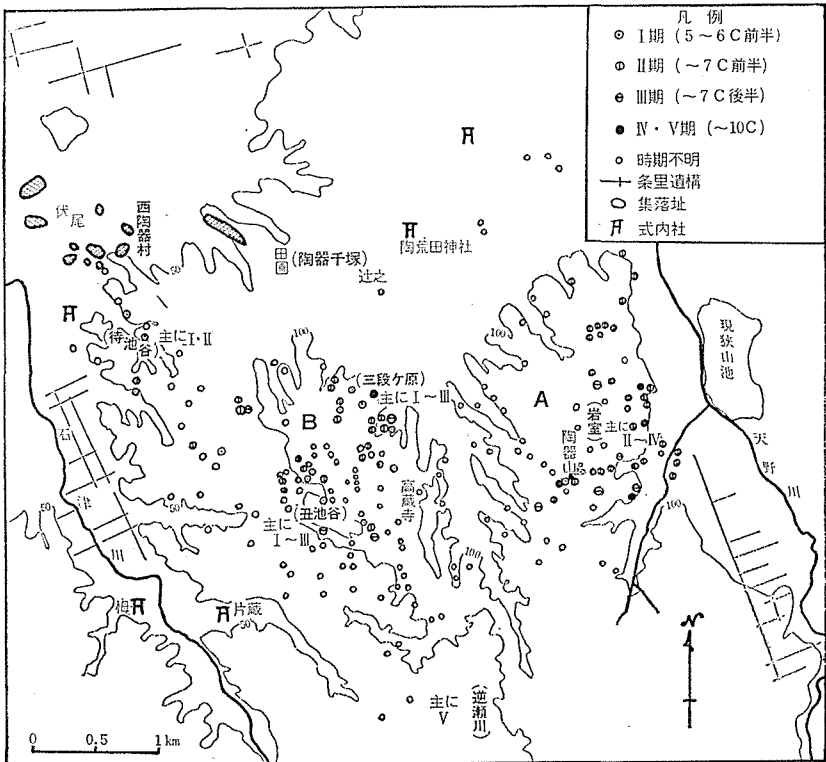
しかし須恵工人集団が上記の諸条件を満たす場所を選択したとするのみでは、依然として問題の解決には遠い。私の主たる関心事はそれらの背景を認めた上での工人集団の居住地の究明にある。そこに於て先述の例の全てに共通する丘陵下の傾斜変換線の須恵地名に注目すべきであろう。勿論、集落遺跡の発掘などによって正確な居住地を決定する必要があり、またⅢ期以降姿を消す窯址群は須恵地名と

結びつかないという説も存在するが、現段階では工人居住地(窯業集落)として須恵の名をもつ集落付近を考えても大過ないであろう。須恵器生産が権力を媒介として開始された以上、工人集団の居住地は純粋の自然発生的村落であったとは考えられない。帰化人系の技術指導や権力に影響されたからこそ、共通の立地条件や国府と河川によって結ばれる事実も理解される。また大規模な窯址群を維持し得る労働力や、製作に際して専門的な技術が必要なことから、かなり定着のかつ専門的な性格を有したことも推察できる。しかし須恵工人は完全な手工業者で農耕とは分離した存在であったわけではない。生産品の需給関係については後述するが、この面でも上部権力の規制を受け宮戸として雑戸に編成され口分田をも供される存在であった^⑫。それ故、土器生産の一方で彼らは農耕にも従事していたのであり、私がかここで強調した平野周縁の居住地はこの点でも好都合であった。調役を免ぜられた彼らは、檜崎彰一によれば貢納的隸属によって上部権力と結ばれ、在地にあって農閑期を利用して土器生産に従事したとされる^⑬。しかし先述の事例中では滋賀県の例を除けば他例は灌漑や面積などの点でや

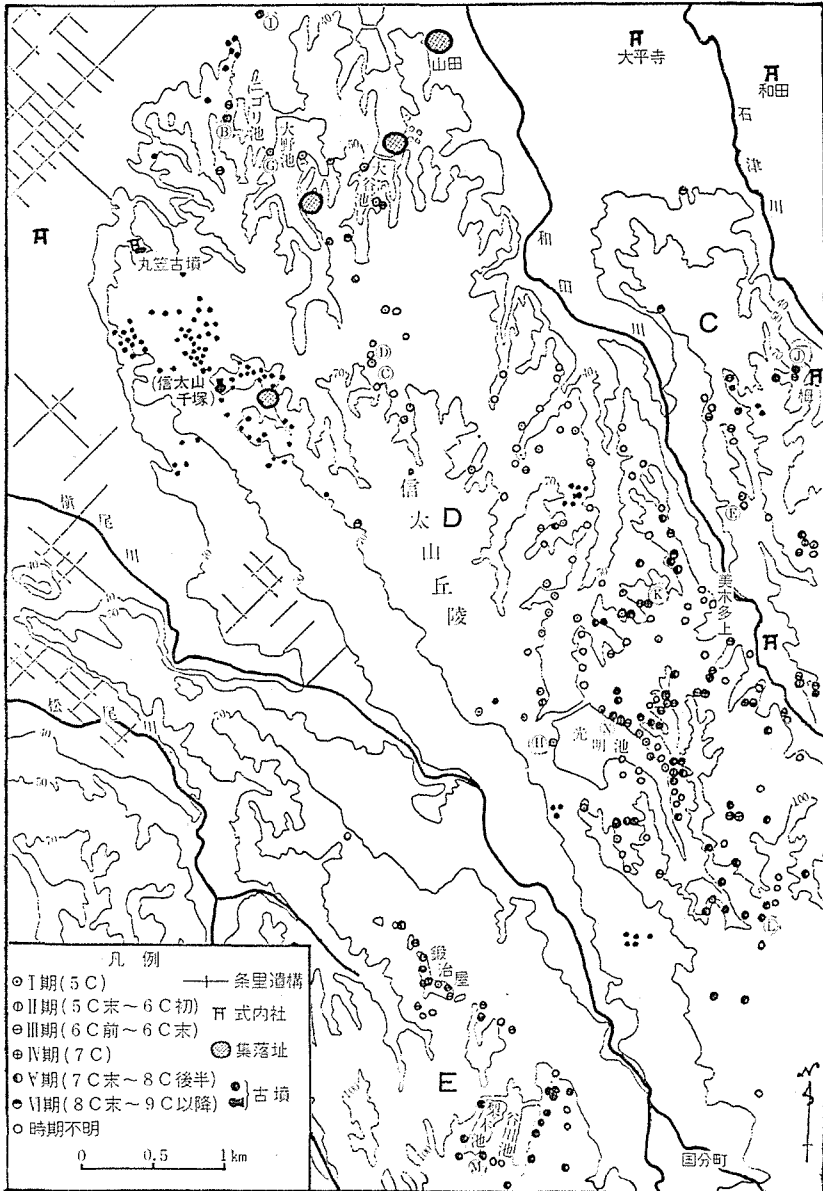
や不利な平地が須恵に近接しており、少なくとも古代に於ては有利な耕地ではないことが多い。それ故、私は農業従事の可能性を認め周辺の一般農村からの完全な独立を否定しつつも、窯業への専業度は非常に高いものであったと評価する。従って狩野久のいう共通の生活圏を有した雑戸村を形成していた^⑥工人集団にとって、背後の丘陵地帯は窯業地として前面の平野よりも一層重要な生産の場であったといわなければならない。そこで、これらの諸事実をさらに検討するために、わが国最古かつ最大の窯業地域であるいわゆる大阪南部窯址群について検討を加えることにする。

二 大阪南部窯址群について

須恵器生産が最も早く開始された大阪南部窯址群は、現堺市・和泉市にまたがる丘陵地帯にひろがる。五世紀以来この丘陵地帯は全国最大の規模を有する窯業地域であった^⑦。畿内では七世紀以後の短期間で小規模な窯址群



第11図 大阪南部窯址群(高蔵寺・陶器山地区)の時期別分布



第12図 大阪南部窯址群(柵・大野池・光明池・梨本池の地区)の時期別分布
(図中の④~⑩はⅢの分析試料記号の窯址と一致する)

は、他にいくつも見られるが、現在五〇〇基以上の窯址が確認され八・九世紀の窯だけでも一〇〇数十基を有するこの大阪南部窯址群に匹敵する例は存在しない。^⑧それ故、畿内全域を対象とした窯業地域と国の範囲をこえた交易圏の形成されていたことが予想されるが、これについては後述することにし、当面は歴史的・自然的背景に眼を向けた上で立地や時期別移動及び工人集団の居住地について考察したい。

(一) その歴史的背景 大阪府南部の沖積平野には数多くの弥生時代以来の大規模な集落址が分布し、さらに四世紀後半から五世紀中葉にかけての池溝・灌漑用水路の開発によって耕地は丘陵の谷部へも拡大される。書紀崇神・垂仁紀の埴化系技術導入の開発記事や、古市・百舌鳥古墳群の成立が、この地域の歴史的重要性を物語る。即ち以上のような大和朝廷との密接な関係のもとに、窯業地域が形成された。書紀崇神七年の記事には陶邑の名が見え茅渟県に置かれたことがわかる。大阪南部が茅渟県に含まれたことは確かであり、陶邑の名は泉北部の旧陶器村の名に遺存している。

さらに式内社の陶荒田神社^⑨があり、高蔵寺もまた古くは大修(須)恵院と称したことは同寺久安五(一一四九)年銘の鏡

によって判明している。^⑩従ってこの窯址群が茅渟県陶邑の須恵工人集団によって営まれたことは確実であろう。^⑪窯址群形成以来この地域の開発は飛躍的に進展したであろうが図に見る如く、五〇m以下の平野部や谷部には条里遺構が残存し、耕地としての開発がやがて丘陵脚下にまで及ぶに至ったことは明らかである。また古墳時代以降の集落遺跡や式内社が五〇m等高線付近に立地することも注目されるがこれについては後で詳細に述べたい。

(二) その自然的背景 窯址群の立地する丘陵地帯はいわゆる大阪層群であり、殆んどが砂礫と粘土から成る。大阪層群の丘陵は一般に緩傾斜でありこの阪南の丘陵も同様である。河内長野市付近では礫層が顕著であるのに対し、当地域では礫層が少なく最下部にも粘土層が堆積している。これらは海成粘土層であるが大阪北部窯址群の立地した千里山丘陵・茨木・高槻・枚方^⑫にかけての海成粘土層が厚いに比較すると、ここでは薄い。また大阪平野周辺部では粘土層が上位の砂礫層に削られ、高蔵寺・光明池付近では海成粘土層が南へせん滅している。しかし大阪南部窯址群の丘陵地帯では海成粘土層にはさまれて、陸成粘土層が数層

含まれており、両方の粘土層が表面付近ではベルト状に相互に分布している。^⑤ 田辺昭三らの焼成実験によれば、陸成粘土の方が陶土としてはすぐれているとの結果が報告されている。^⑥ しかし海成粘土の内でも大阪層群の粘土は、内湾性で汽水性というべきものであり、採取の後に風化などによって陸成粘土とほぼ類似した性格になる。^⑦ 加えて海成・陸成の粘土が極く近接して得られるため、須恵器の原料として陸成粘土のみを使用したと断言することは現段階では無理であろう。しかしいづれにせよ粘土が地表面近くで多く得られることは窯業立地の上で非常に有利な条件であったことを認めねばならない。

さらに燃料の面から見ても四〇mないし五〇m以下の低段丘面は沖積平野と同様に水田として利用されているのに対し、丘陵部は現在でこそ果樹園や住宅団地として開発されているが、明治二年の仮製二万分の一の信太山図幅によれば殆んどが松林・果樹・雑木林などでおおわれている。丘陵奥部へ進むにつれ松林や雑木林の密度は高くなるが、当時も薪炭として丘陵に生成している樹木を使用したであろう。三渡俊一郎は愛知県の窯址で焼成に必要な燃料を得

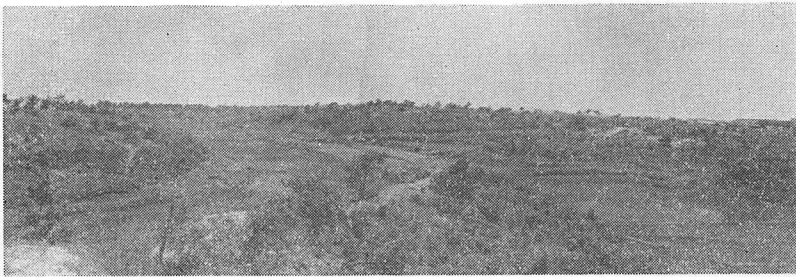


写真1 大阪南部窯址群の丘陵地帯—信太山丘陵—

るための山林面積を算出しているが、ここでは具体的に応

用することはできなかった。^⑧ しかし三代実録貞観元(八五九)年の条には陶器焼成のための薪炭を伐る山の争奪を和泉・河内両国が起こしたことが見える。場所としては逆瀬川付近が比定されるが、この陶山之争は燃料の不足を示し、また律令制下に於て国毎に再編成されて行ったことを物語る。平安時代に至ってさしものこの窯業地域も急速に衰退するが、燃料の不足も大きな要因になったに違いない。^⑨ 次に須恵器製作に不可欠な水の点でも石津川などの支流が丘陵沿いに流れており

水の得やすい地でもあった。^⑨ 以上のような恵まれた自然的基盤があり、しかも天皇勢力の大坂平野に於ける経済活動と保護を背景にしてこそ、大阪南部の大窯業地域の形成と発展が可能であったとしなければならぬ。

(三) その立地と時期別の移動 窯址群は東は狭山池から西は信太山にまでひろがるが、ここでは便宜上二群に分けて論を進めたい。

高蔵寺・陶器山地区については既に報告書で詳細に述べられているが以下それに従って述べよう。この地区で現在二〇〇数十基発見されている窯址の大部分は、標高五〇mから一五〇mの丘陵斜面に構築されている。中でも五〇mから一〇〇mの斜面よりも一〇〇mから一五〇mの丘陵上・中斜面に密度が高い。斜面に構築されていることは登窯の構造上当然であるが、谷の入口よりもむしろ谷奥部の狭隘な小支谷に臨む斜面に密度が高いことも特徴的なことである。^⑩

次に高蔵寺・陶器山地区の窯址の時期別分布に關しては田辺昭三らによる時期区分即ちⅠ期(五世紀～六世紀前半)・Ⅱ期(七世紀前半)・Ⅲ期(七世紀後半)・Ⅳ期(八世紀

末)・Ⅴ期(九世紀初～一〇世紀)を採用する。そこで個別的に時期が報告されているものを分析すると、和田付近のいわゆる待池谷支群ではⅠ期の窯が圧倒的に多くⅡ・Ⅲ期のものも存在する。丑池谷支群でもⅠ期からⅢ期の各時期の窯が漸次減少しつつも連続しており、三段ヶ原支群でもⅠ・Ⅲ期までの連続性が認められる。しかし三段ヶ原支群ではⅤ期の窯が一例だけ後世築窯されている。従って以上の待池谷・丑池谷・三段ヶ原の各支群はⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期と減少しつつも連続していることがわかる。この三支群に対して東の岩室支群ではⅡ期の窯が圧倒的に多く、以下Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期の窯が続く。さらに南の逆瀬川支群ではいずれもⅣ・Ⅴ期とりわけⅤ期の窯が多い。^⑪ 以上の事実から最初は丘陵の内でも最も平野に近い約五〇mの待池谷支群に工人の手が及び、それがさらに丑池谷・三段ヶ原両支群の高蔵寺地区を中心にして五世紀から七世紀後半にかけて操業が拡大されたことがわかる。しかしⅡ期の六世紀前半には新たに岩室周辺の陶器山丘陵斜面に築窯され、ここではⅡ期に最盛期を示した先の三支群が次第に衰退するのに対して、Ⅲ期以降にまで継続する。しかし奈良・平安時代になると

窯業の中心は谷奥の逆瀬川支群に移動する。それ故、窯業地域としての中心は待池谷・丑池谷・三段ヶ原↓岩室↓逆瀬川の順に移動していったことが理解されるのである。

梅・大野池・光明池・梨本池を中心とする地区即ち西部地区について見ると、窯は四〇mから一二〇mの丘陵斜面に構築されているが、二〇〇数十基の内、数量的には光明池を中心とする七〇mから一〇〇mの丘陵斜面に最も密度が高い。②。ここでも時期別の分布を検討するが、森浩一によるⅠ期(五世紀)・Ⅱ期(五世紀末〜六世紀初)・Ⅲ期(六世紀前半)・Ⅳ期(八世紀末〜九世紀以降)の時期区分を採用したい。③。個々の時期の判明しているものを見ると、Ⅰ期前半の窯址はニゴリ池窯をはじめとして大野池から光明池にかけての四〇mから七〇mのいわゆる信太山丘陵斜面に多い。とりわけ最古のニゴリ池窯が丘陵先端に立地しており、窯業地域としての開発が丘陵先端から極めて短期間の内に光明池にまで達したと考えられる。しかしⅡ・Ⅲ期の窯は拡散して梅・美木多・鍛冶屋の各地や大野池周辺へとひろがる。梅・美木多両群は、大野池から光明池にかけてのⅠ期の窯

址群から連続的に発展し、石津川西斜面から和田川支谷を経て光明池にかけての地帯には六世紀(Ⅲ期)の一大中心を想定せねばならない。これに対して榎尾川西南丘陵の鍛冶屋の支群は、ほぼ一〇〇m等高線に沿って単独的な様相を呈しており、少数乍らⅠ・Ⅱ期の例も存することから、大野池↓光明池の進展の間に分派して特にⅢ期に小独立的な支群を形成したと見るべきであろう。先の美木多・梅・光明池の一大群はⅢ期・Ⅳ期・Ⅴ期・Ⅵ期即ち六世紀から平安時代にわたる連続性を有した地域を形成するのに対し、後者の鍛冶屋支群ではⅣ期の窯は一例であるが、さらに谷奥に入った一〇〇m以上の梨本・谷川両池周辺の斜面のⅤ期の窯址群に継続するのが認められる。以上の事実から先と同様に窯業の中心を求めるならば、大野池↓光明池↓美木多上・梅↓美木多上・光明池東南部の動きと、鍛冶屋↓梨本池・谷川池周辺の二つの動きを認めねばならない。

次に大阪南部窯址群を総合的に見れば、その立地に関しては西部の地区の方がやや標高の低い斜面であること、他は、全く同様の傾向を示すといえる。さて私はここで個々の舌状の丘陵を一単位としてとらえる。即ち東から列挙

すれば、(A)岩室中心の一〇〇m以上の丘陵・(B)西陶器村から高藏寺に至る五〇〜一三〇mの丘陵・(C)榎西南の四〇〜八〇mの丘陵・(D)大野池・信太山から光明池・美木多上にかけての四〇〜一〇〇mの丘陵・(E)鍛冶屋・梨本池・谷川池の八〇〜一四〇mの丘陵である。(A)から(E)の内、(E)は先述の如く独立的な一支群である故に(A)から(D)についての丘陵毎の性格を検討すると、(B)・(D)はともに五世紀に始まり丘陵先端部から次第に丘陵奥部へと開発されて行く。即ち丘陵先端部(五世紀)↓中央部(五世紀から七世紀)↓奥部(七世紀末以降)の移動が見られ、特に丘陵中央部では約三世紀以上にわたる連続的な窯業の中心が存在している。この(B)・(D)に対して(A)・(C)の丘陵では、おそらく(B)・(D)から分派して六世紀前半に最盛期に達し、以後は衰退しつつも辛じて八世紀以降にまで存続する傾向が読み取れる。従って私は窯業集団としての須恵工人群を(B)と(A)、(D)と(C)の二大群と、(E)の小支群に分けて考える。この際(B)・(A)の陶器千塚、(D)・(C)の信太山千塚がその二系統の工人群と密接な関係をもつものとして注目される。さらに又、いずれに於ても〃丘陵先端部↓中央部↓中央部及び東の別の丘陵↓両丘陵の奥

部〃への時期的な移動が見られることについて、私は支配組織の変化もさることながら、主として原料粘土と燃料を求めての移動であると解釈したい。

(四) 工人集団の居住地 ここでは直接の生産者たる須恵工人群の居住地について考えたいが、製作上の高度な技術を考慮に入れば専門的工人の存在を疑うことはできず、特に最古の大規模な大阪南部窯址群については長期間にわたる大集団を想定すべきである。五世紀前半では一般の集落址からの須恵器の発見例は少ないが、五世紀末以降の畿内の集落址からは発見例が多く、六世紀には少なくとも畿内に於ては須恵器は支配階級の独占物ではなかった^⑨。土師器とは異なり大形の登窯による須恵器製作には莫大な労働力が必要であり、しかも一基の窯が数回以上の修理によって数年間操業されたものとする^⑩と、大量の需要を満たすためには大和朝廷もしくはそれに類する権力による組織的かつ連続的な工人集団が存在したとしなければならない。それ故、專業的な工人集団の居住地としては窯址付近の一時的な作業所を想定するだけでは不十分であり、ある程度の定着的で永続的な集落が形成されていたと考えるべきであ

る。そこでここでも先のように東部と西部の二地区に分けて考察を進める。

先ず東部の高蔵寺・陶器山地区については標高四〇mから八〇mの丘陵上に陶荒田神社などの式内社が分布する。

さらに近年の発掘調査によって丘陵端から平野に臨む伏尾の段丘面に古墳時代の集落址が確認された。集落址からはⅠ期以降Ⅲ期に至る須恵器が数多く出土しており、当地区で工人集団が最初に定着した場所と推定されている。窯業の中心が岩室や逆瀬川に移るに従って、居住地の移動したことが当然予想されるがこの点に関しては明らかでない。

静岡県浜名郡の川尻古窯では、集落址は谷の入口に存在しそこから稜線をつたわって窯場に出かけたという見解が発表されているが、おそらくここでも伏尾から高蔵寺に至る約二kmの稜線上の道を想定すべきであろう。また標高約五〇mの田園・辻之の段丘上にある陶器千塚は、須恵器窯に類似したカマド塚をはじめⅡ期の須恵器を数多く出土する古墳の存在から、工人集団の群集墳であると考えられ、近傍の湯山古墳は工人集団の長のものとされている。従って陶器千塚や陶荒田神社とあわせ考えて、私は伏尾段丘面

を中心として順次岩室部落に向かって五〇mから一〇〇mの緩傾斜面上を工人集団の居住地が拡大移動していったとする。仮に工人が窯業のみでなく一方では農耕にも従事していたとするなら、窯の立地する丘陵を背後に、平野を前面にしたこの段丘面上の居住地こそ、窯業と農業との両面的性格を表現するものといえよう。工人の居住地が農業には不適な丘陵を背後にしながらも沖積平野に近く立地する例は先にも述べた通りであり、また三重県千里ヶ丘団地遺跡でも見られるのである。

次に西部の梅・大野池・光明池・梨本池を中心とする地区についても全く同様の事実が看取される。式内社は標高三〇mから四〇mの平野周縁に分布しており、その地点は糸里遺構の残存する限界でもある。また主にⅠ・Ⅱ期の須恵器を数多く出土する南北約五〇〇mに及ぶ山田の大集落址をはじめ、信太山丘陵端から沖積平野にかけての三〇mから四〇mの緩傾斜面には古墳時代から奈良時代にまで継続する集落址が発見されている。従って私はこの地区でも丘陵から平野への傾斜変換線に沿う工人集団居住地を考えたい。この場合も勿論、丘陵奥部への稜線沿いの道や居住

地の移動を考慮に入れる必要があることはいうまでもない。さらに注目すべきは先の陶器千塚と同じく、この地区でも信太山丘陵北西隅に信太山千塚なる群集墳が存在することである。信太山千塚もまた須恵工人集団の墳墓であり、丸笠古墳などの教基の前方後円墳は盟主的な者のそれであったと考えられる。

以上、大阪南部築業地域に於ける工人集団の居住地は、特に初期の窯の分布する丘陵端から平野にかけての傾斜変換線に立地した可能性は極めて強いとすべきであるが、さらに私は先に触れたように丘陵毎の窯の時期別分布の特色などから二大工人群を想定する。需給関係などの面では一大築業地域として把握すべきであろうが、窯の時期別分布の特色と二大群集墳の存在は、この大阪南部築業地域が二系統の工人集団によって形成されていたことを示唆するものであろう。

三 奈良県の瓦窯と宮都・寺院

奈良県では宮都や寺院と直接結びつく瓦窯が多い。瓦窯からも須恵器は時として少数は出土するが、東国によく見られるような須恵器窯を後に瓦窯に変えた例は少なく、最

初から宮都や大寺の瓦窯として設けた場合が多い。

そこでここでは現存する奈良県の瓦窯を宮都や寺院との関係に於て検討してみよう。奈良県の鎌倉時代以前の窯址については岸熊吉の研究がある。約三〇例近く(10)の窯には須恵器窯・瓦窯あるいはその併用窯があるが、瓦窯が殆んど須恵器窯は極端に少ない。年代的にも奈良時代の属するものが最も多く、構造的にも奈良時代の登窯と平安時代以降の平窯が見られる。この内、奈良時代の平窯の発見例が少ないのは、平地に築窯された故でもあろう。また先述の如く土師器や須恵器の窯は少なく、少数乍ら発見されている例も奈良時代末か平安時代初期の窯で、古墳時代以降莫大な需要のあった須恵器をどこから得たかが問題になる。しかしこれについては後述のこととし、ここでは瓦罽焼成用の瓦窯を中心に見る。

三井瓦窯址は法起寺西方の北から南にのびる標高約七〇mの尾根の西斜面に立地する有階式の登窯である。丘尾端に近い丘陵隆起部に東面して営まれた前方後円墳の後円部西斜面の中腹にあり、登窯構築に適した傾斜地にあるとともに斑鳩池に接していて用水の点でも恵まれている。窯か

ら出土する鏡瓦と同類のものは法起寺・法輪寺で見られ、「法輪寺伽藍木版絵図」や『法隆寺古今目録抄』所載の瓦塚に相当することから法隆寺・法輪寺とくに法輪寺の瓦を焼いた窯であることが知られる。⁽¹⁰⁾ 法輪寺とこの三井瓦窯は距離的に極めて近接しており後述の多くの瓦屋と似た位置に立地している。次に五条市では前記の三井瓦窯や後述の寺院直属の瓦窯とは、性格を異にする窯址群が存在している。これについては先にも触れたが、中でも代表的な荒坂窯址では計一〇基が発見されており、金剛山東麓に派生した小丘陵の傾斜面に構築されている。これらの窯は登窯であるが出土した瓦のうち、鏡瓦は法隆寺・法起寺・岡寺・飛鳥寺・川原寺（弘福寺）などで見られるものであり、宇瓦は法輪寺・山田寺などで見られるものである。瓦以外にも奈良時代前期頃の須恵器が出土しており、同一窯で併焼したことが知られる。さらに五条市今井天神山東南斜面では、飛鳥時代の鏡瓦や奈良時代の鴟尾、さらにその南東方の五条市牧代の四基の登窯からは飛鳥寺で見られる瓦が発見されている。⁽¹⁰⁾ 従ってこの五条市須恵を中心とする窯址群では、須恵器の他に飛鳥寺にはじまる複数の寺院の瓦埴や鴟尾を

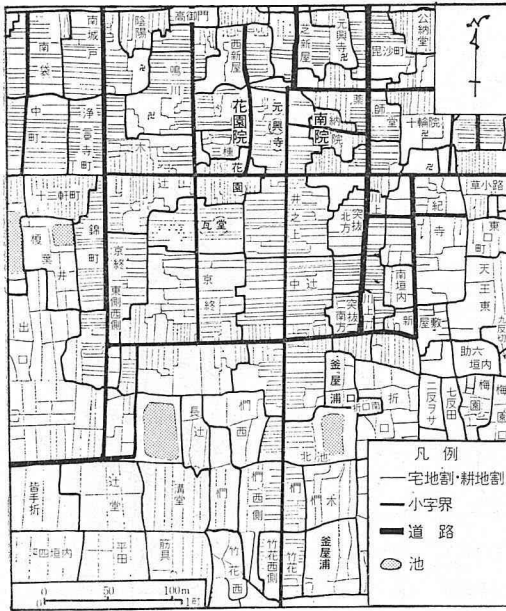
製作したことが理解される。前述の三井瓦窯や後述の寺院付属の瓦窯が、各々単一の供給先に対するものであったのに対し、奈良盆地南半部の諸大寺を対象にした窯業地域の機能を有していたといえる。飛鳥寺では寺域の東南の外域地の丘陵端西南斜面に位置した飛鳥窯址でも必要な瓦を製作していたことが知られているが、⁽¹⁰⁾ 同寺の瓦はまた五条でも製作されていたのである。従ってこの五条市須恵を中心とする窯址群は、各寺院付属の瓦屋に代ってあるいはその不足分を補うために注文に応じて製作・供給していたと考えてよい。この奈良県で殆んど唯一といってよい窯業地域を形成した力は、須恵工人群であったことは須恵地名や須恵器の出土からも明らかである。技術の点からも飛鳥時代の瓦上面の両端に同心円叩文の見られる例があり陶質土器製作工人の手に成るものである。⁽¹⁰⁾ 小林行雄も須恵器の工人が百濟瓦師の下に最初の屋瓦製作に参加したことを大野寺その他の寺の瓦を例に出して論じている。⁽¹¹⁾ 以上のことから当面対象としている五条市須恵の窯業地域には、従来の須恵器製作の一方で帰化人の新技術によって諸大寺の瓦を製作した工人群が居住したことがわかる。工人集団の居住地

としては前述の如く、丘陵を背後に控え前面に吉野川と平地を有した須恵地名を強調したい。また五条市は現在もなお良質の粘土に恵まれた条件を利用して瓦製造等の窯業が盛んであることも、⁽¹¹²⁾他の古代窯業地域の多くと共通していることをも付加しておきたい。この場合、五条の窯業地域から諸大寺へ瓦を運搬する際の交通路を考えねばならないが、五条が水陸交通に於て恵まれた交通要路であることが注目される。直線距離約三〇kmの法隆寺・法起寺・法輪寺へは、宇智川や葛城川の水運を利用した可能性が強い。また飛鳥寺・岡寺・川原寺・山田寺へのルートとしては、五条から北東行する吉野口・土佐を経て飛鳥へ通じる陸路（約一五km余）と、吉野川を溯航し下市口へ達した後に陸路芦原峠・土佐を経るルート（陸路は約一〇km）のいずれかが便利であろう。⁽¹¹³⁾

他の瓦窯について見ると寺院付属のものが多く、五条の例とは全く異質である。三井瓦窯址以外にも前述の飛鳥窯址は二〇段を有し大量生産を目的とした奈良時代の造寺造塔の中心地に於ける重要な例である。⁽¹¹⁴⁾橿原市の久米寺の南西竹林中にある久米窯址からも奈良時代と推定される瓦が

出土している。⁽¹¹⁵⁾さらに川原寺（弘福寺）の関係では寺域に近い弘福寺窯址が知られるが、同時に弘福寺は天平一八（七四〇）年の弘福寺文書等によって北葛城郡上牧村の下牧瓦窯をも有していたことがわかる。⁽¹¹⁶⁾

一方、盆地北半部の諸大寺の瓦屋については掘池春峰の研究がある。まず大安寺の瓦については、天平一九（七四七）年の流起資財帳に山城国棚倉瓦屋と大和国添上郡瓦屋の二所が記されている。現京都府相楽郡に属する棚倉瓦屋は良質の粘土を採取し得る丘陵地帯であり、他の添上郡瓦屋は大安寺東北方にある杉山古墳南端の三基を下らぬ瓦窯が、出土瓦の検討によって比定されている。大安寺が寺地に接した瓦屋の他に、遠く棚倉にも瓦屋を求めたことは、東大寺造営以前は官の大寺として筆頭に立った大安寺域に適當な丘陵がないことから肯き得る。次に元興寺の瓦屋は「元興寺伽藍図」には明示されていないが、永承の『造興福寺記』に瓦屋一ヶ所の存在が明らかにされていて、飛鳥寺から移る際に瓦を相当量運んだにもかかわらず、やはり⁽¹¹⁷⁾直属の瓦屋を有していたことがわかる。この瓦屋に關しては元興寺南園にあった花園園（現在の小字花園の名からも確

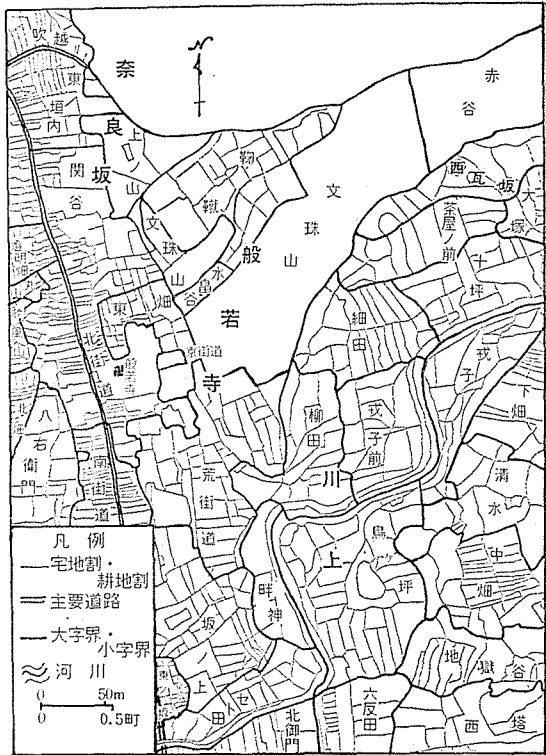


第13図 元興寺瓦屋推定図（奈良市地籍図一明治）

実)の南西方に位置する小字瓦堂の地が有力である。⁽¹⁶⁾ 瓦堂の地は東に高く登窯を築くには好適な斜面で、小河川による水の便もよく、寺域に近接して営まれた例のひとつとしてあげ得る。

東大寺の瓦屋としては天平勝宝八(七五六)年の四至図に、東京極路の東・山階寺東松林の南西・道を隔てて東西に貫流する川に接して「瓦屋」の名が見え、これが通称「荒池

瓦窯址」といわれる窯址群に比定されている。ここからは東大寺の瓦や東大寺建立以前あるいは後世の興福寺の瓦が出土していて、東大寺瓦屋のひとつであることは確実であるが、他の瓦屋としては東大寺川上庄内の瓦坂（現川上町）をあげることができる。現地籍図中にも小字西瓦坂なる地名が遺存しており飯盛山北西北丘陵斜面にあたる。斜面には登窯址が位置し、東大寺講堂のものと同形式の鎧瓦や緑釉瓦が発見されている故である。これら東大寺の二瓦屋の内、荒池瓦窯は後に興福寺の東瓦屋として利用されるに至るが、東瓦屋に対して興福寺西瓦屋は『山階寺流記』によると南大門の南西には花園があり、西には瓦屋のあったことがわかる。従って現在の東向町の東方の台地のうち、かつて興福寺の古瓦が発見された地が比定されている。注目すべきは江戸時代の『奈良曝』⁽¹⁷⁾や『奈良坊目拙解』中に、この地が瓦釜町と呼ばれて古くは瓦を焼いたという記述が見られることである。このことは寺院付属の瓦窯を推定する上で、瓦関係の地名が重要な手懸となることを物語るものである。さてこの西瓦屋の位置する台地斜面から、東瓦屋の荒池瓦窯址にかけての猿沢池



第14図 東大寺瓦屋推定図 (奈良市地籍図—明治)

一帯は、三条大路の下が懸崖となり春日神社参道として改作された丘陵が西に伸びる窯の構築に適した地形である。水もまた得やすく、加えて現在でも市内の瓦製造業者が注目する程の良質粘土が地表下数十cmで得られる。興福寺の瓦窯は他にも県民科学センター敷地で発見された約一〇基の平窯(平安時代)があるが、いずれも寺域のこのような恵

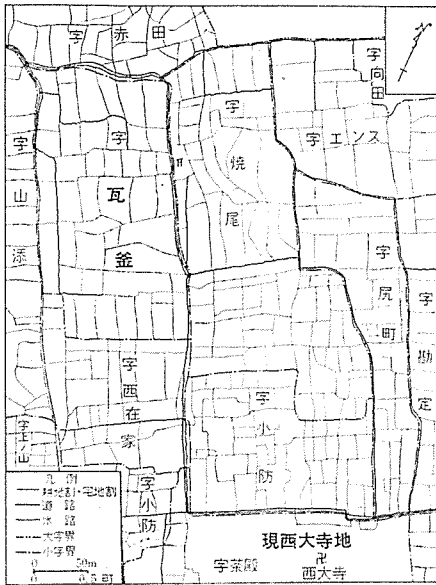
しているからである。瓦関係地名が寺院の瓦屋と多く結びつくことは先述の例でも明らかであり、盆地南部の膳夫寺に於ても瓦釜なる小字名といわゆる香久山窯址の例がある。従って私は西大寺に於ても寺域に接した瓦釜の地を瓦屋に比定し、東大寺・興福寺・元興寺・大安寺や唐招提寺・薬師寺あるいは盆地中南部の法隆寺・法輪寺・飛鳥寺・久米

まれた自然的条件を利用した瓦窯である。次に西大寺の瓦屋に関して、『西大寺資財流起帳』にも記載されていないが、造西大寺司の設けられる程の大寺に瓦屋のあったことは充分予想される。そこで掘池春峰は『西大寺田園目録』中の記事に見える「西大寺領字瓦坂池上北谷一段 字瓦坂池上南谷半」の瓦坂を西大寺瓦屋の地に推定している。しかし私は西大寺の北西に接した地を瓦屋として考える。何故なら西方から東にのびる丘陵端という地形的条件を具備するのみならず、明治年間の地籍図にも西から順に山添・瓦釜・焼尾なる小字名を残

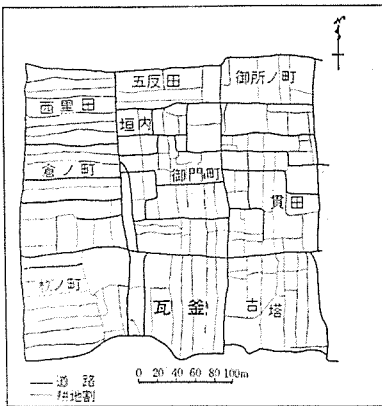
寺・膳夫寺と同様の、寺に極めて近く設置された瓦屋として理解したい。

以上見たように、奈良の諸大寺には寺域に近接した瓦窯が多い一方、大安寺のように大和国外に瓦屋を有している例もある。総国分尼寺たる法華寺についても福山敏男によって京都府相楽郡精華町山田のいわゆる乾谷瓦窯付近の地が天平宝字四（七六〇）年の「造金堂所解」の瓦屋に比定されている如くである。

次に藤原宮・平城宮の瓦製作地について見よう。藤原宮



第15図 西大寺瓦屋推定図（奈良市地籍図）



第16図 勝夫寺瓦屋推定図（明治22年地籍図）

の瓦窯としては日高山瓦窯址があり、推定宮城正門の南約一五〇mの日高山北端部斜面に近い平窯で宮址出土の瓦と全く同じ瓦が発見されている。⁽¹²⁶⁾しかし宮都造営に必要な瓦の全てをここで製作したとは到底考えられず、瓦を他所から運んだ可能性が強い。⁽¹²⁷⁾さらに香久山東の丘陵部で発見された一〇基以上の登窯も詳細な調査は成されていないが、藤原宮の瓦製作地として考える必要があろう。⁽¹²⁸⁾ところで日高山瓦窯で製作された瓦は平城宮址でも発見されており、藤原宮の瓦を平城宮へ移送したことが証明されているが、それだけでは需要を満たすことは不可能であった。この場

合、京北班田図に記された瓦屋里（現中山町）から歌姫町にかけての盆地北縁の奈良山丘陵にある窯址群が注目される。同丘陵では現在四〇基

以上の窯址が発見され、とりわけ瓦屋里に当たる中山町では平城宮と同じ瓦を出土する瓦窯が発見されていて、平城宮の瓦製作の中心であった。⁽¹⁶⁾ 標高一〇〇m程度の奈良山丘陵は洪積世更新統から鮮新統に属し、京都府の山田・乾谷窯址群への丘陵へと続く。⁽¹⁶⁾ 瓦屋里を中心とする瓦窯からは約3kmで宮都へ達し、陸路あるいは秋篠川を利用したであろうし、一方京都府の乾谷・山田窯址群や奈良県の歌姫窯址群からは歌姫越のルートと現国鉄関西線沿いの東ルートが利用されたと考えられる。⁽¹⁶⁾ 法華寺の山田の瓦屋の場合も同様であるが、いずれにせよ藤原宮と全く同じく平城宮でも近接した丘陵地帯が瓦製作地帯として選定されたといえる。

さてこれまで述べてきた奈良県の瓦窯は大別して五群に分けられる。即ち①奈良盆地北縁部の丘陵地の窯址群、②奈良市内平野部の窯址群、③矢田丘陵東斜面及び王寺南部の丘陵の窯址群、④飛鳥・藤原周辺の丘陵の窯址群、⑤五条市須恵を中心とする窯址群がそれである。他に二上山屯鶴峰付近に小須恵器窯址群が存在する。奈良盆地東縁のいわゆる春日断層崖とその下の比高二〇〇〜三〇〇mの南北に連

なる丘陵には窯址は発見されていない。これは良質の陶土が得にくいことに起因するものであろう。①群は先述の如く、更新統から鮮新統に属する泥・砂・礫層の標高約一〇〇m、盆地面との比高二〇〇〜三〇〇mの佐保・佐紀の丘陵と西の京丘陵及び京都府相楽郡の丘陵に立地している。その殆んどが平城宮や諸大寺の瓦を製作するいわば直属の瓦屋的な存在であった。従って個々の窯は特定の需要者の専属的性格を有していたともいえる。②群は五群中では例外的に平野部に位置するが、個々の窯は古墳の墳丘や小丘の斜面を利用して、やはり同様の地形的条件を有している。さらに興福寺や東大寺のみならず唐招提寺などでも、現在瓦製造業者や赤膚焼が立地することからもわかるように良質の粘土に恵まれていることも他群と同様である。しかし③群の全てが寺院直属の瓦屋でありむしろ点的な存在であったといえる。次に④群は④の延長の更新統から鮮新統の矢田丘陵東端と、同様に洪積世の馬見丘陵上に位置する。④群の窯も殆んどが近在の寺院の造瓦を目的としたものであり、弘福寺庄内の瓦窯はやや例外的である。⑤群は他群とは異なり領家コムプレックスの花崗岩を中心とする

丘陵斜面に集中している。⁽¹²⁸⁾この群も藤原宮造営のための窯址群と諸大寺の瓦窯がその中心を占め、①②群と共通する面が多い。これらの四群と異なる性格を有するのが先にも記した五条市須恵の③群である。この群は更新統の丘陵上に位置し、自然的条件では他群と全く同様であるが、他群が特定施設の直属的な瓦窯の集合体でいずれもその施設に極く近接するのに対して、③群は五条周辺に供給するよりむしろ盆地南半部特に飛鳥地方や斑鳩地方へ供給していた。須恵器は極く少量であり到底需要に追いつき得るものではなかったが、瓦の点を強調する時、その恵まれた自然的条件と後世に市場町・宿場町となる交通的条件を生かした奈良盆地に於ける代表的な窯業地域であったことが理解されるのである。さらに埴輪製作所と⁽¹²⁹⁾考えられる遺跡が寺川流域の沖積平野に立地するのに対し、これら五群の瓦窯はその構造上殆んどが丘陵などの斜面に立地している。このことに関して私は窯址群をひとつの指標として、丘陵部は平野部と異質の性格を有しつつもやはり古代に於て既に重要な生活圏としての位置を確保していたことを強調したい。

III 須恵器生産地と需要地——産地分析の試み——

前章では須恵器生産地に於ける窯址群と工人集団の居住地について考察し、さらに同じ窯業の内でも比較的生産品の移動を説明しやすい瓦によって奈良県内の諸施設と窯との結びつきを述べた。瓦製作地と宮都や寺院、埴輪製作地と古墳の需給関係について事例をあげたのは、とりもなおさず古代手工業を地理学の立場から論ずる際に生産地と需要地を切り離して考えるべきではないという観点に立脚したからである。両者を結びつけその需給関係と物資移動の際の交通等にまで言及してこそ古代手工業は真に地理学的な対象となり得る。この点に関しては先述の正倉院所蔵の国郡里名記録の織物片や宮址出土の木簡は⁽¹³⁰⁾貴重な史料である。しかし本論はあくまでも窯業を中心としたものである。以上、土器の需給関係の説明が先決問題となる。とりわけ主として須恵器については、前章で述べた例中に瓦を指標として須恵器の需給関係を推定し得る場合も見い出せるが、その場合もあくまで推定の域を出ないことが痛感された。

考古学の分野では遺物の型式などの点からその移動を解

明した研究例が多い。たとえば同範鏡の研究はその例であり、型式学的研究が遺物の移動にアプローチし得る可能性を秘めていることは否定できない。しかし一方、同型式即同生産地と断ずることに伴う危険性の多いことも事実である。特に土器のように普遍的な遺物の場合は、同型式であってもその型式のみが伝わる可能性が多く、土器型式の伝播が両地方の文化交流を示しこそすれ現実の遺物が移動したことの証明にはならない。それ故、同型式の土器が他地域でも発見された時、その地域間に土器の移動があったことを証明するためには土器の成分が同一であることを実証しなければならぬ。即ち須恵器についても窯址出土の須恵器と古墳や集落址から出土するそれを、型式などの外見的特色のみでなく含有成分の一致をも証明してはじめてその窯址で生産された須恵器であるといひ得る。この意味で、須恵器の生産地（窯址）は他の各種土器とは異って明確に遺跡として存在し、在地の粘土を使用しさらに出土例が極めて多い故に、自然科学的な方法で産地分析をするには好適な遺物である。

さて自然科学的な方法による遺物の分析は、年代測定を

はじめとして多くの例があげられる。⁽¹⁸⁾これらの遺物の成分分析を拡張すれば、土器や石器のように産地の判明しにくい遺物についても産地を追究し得る可能性が出現するであろう。即ち主成分は産地によって大きく変動することはないうにせよ、微量成分は産地によって変わることが予想できるからである。⁽¹⁹⁾しかし現在まで土器・石器について産地分析に成功した例は極めて少ない。北米の五大湖南沿岸の黒曜石尖頭器に含まれる $Na_2O \cdot MgO$ などの元素を放射化分析することによって、原石採取地が約二〇〇〇km離れた地であることを証明したことは最も鮮やかな例のひとつである。しかしこの場合も日本のサヌカイト採取地と同様に、原石の加工地即ち石器の生産地がどこであったかについては明らかでない。これに対して土器生産の場合は原料としての粘土は前記の黒曜石やサヌカイト程限られた存在ではなく、窯業の立地した付近の粘土が利用されたと考えられる故に、粘土の採取地と土器生産地を密接に結びつけて考察し得るという利点がある。この利点を生かして産地分析に成功したのは、Oxford Ashmolean Museum によるエーゲ海地方の彩色土器の発光分析による例である。この分析結果に

よって北シリアで出土するものの内に、ペロポネソス半島で製作され運搬されてきた遺物が存在することや、クレタ島ではペロポネソス半島に近接するにもかかわらず独自の生産地を有していたこと、さらにキプロスでは、土器がペロポネソスから輸入されると共に移住してきたペロポネソスの工人による独自の生産地も形成されていたことなどが証明された。これは土器の成分分析によって産地を決定することが可能であることを示すと同時に、異なる地点で出土した土器がたとえ同型式であっても遺物自身が移動したとは限らず、型式のみが伝播したり工人が移住した結果でもあり得ることを物語る例として注目すべきであろう。⁽¹³⁷⁾

一 分析の方法と試料

前述のように土器の産地分析の例は極めて少ないが、本論では須恵器窯を主たる対象にした以上、主として大阪府と奈良県の須恵器の産地分析の必要性が痛感される。しかし遺物保存の点からも極微量の試料で要求に耐え、しかも数多くの例を消化するために容易でかつ客観的な判定を下し得る分析方法でなければならない。そこで私は以上の条件を満たすものとして、熱ルミネッセンスによる分析と、

又線回折による分析の二方法を使用した。⁽¹³⁸⁾

二方法の内熱ルミネッセンスによる方法は既に M. J. Aitken⁽¹³⁹⁾ や市川米太⁽¹⁴⁰⁾ によって年代測定の目的で使用されている。また又線回折による方法は土器の分析には使用しやすく同志社大学考古学研究室・田窪宏・梅田甲子郎・山崎一雄⁽¹⁴¹⁾らの分析例が報告されている。これらの分析例はいずれも産地分析の目的を有せず、また試料数も少ないが、本論ではこれらの報告例をも適宜参照したい。⁽¹⁴²⁾

さて今回の分析のための試料として集めた須恵器片は、大別して窯址出土のものと同墳・集落遺跡・宮址出土のものに分けられる。さらに須恵器以外の分析例として市川研究室による関東地方の縄文式土器の例と北部マラヤの土器の例をも参考にした。窯址出土の須恵器試料は須恵器の産地分析のためには不可欠であり、表に示したように全国最大の規模を有する大阪南部窯址群出土の試料を中心にした。高蔵寺・陶器山地区の須恵器の分析例は他にも若干ある故⁽¹⁴³⁾に、今回は西部の梅・大野池・光明池・梨本池を中心とする地区の窯址出土のものに限った。なおこの際、時期的にもⅠ期からⅤ期にわたるようにし可能な限り時期判定の標

第1表 分析試料一覧表

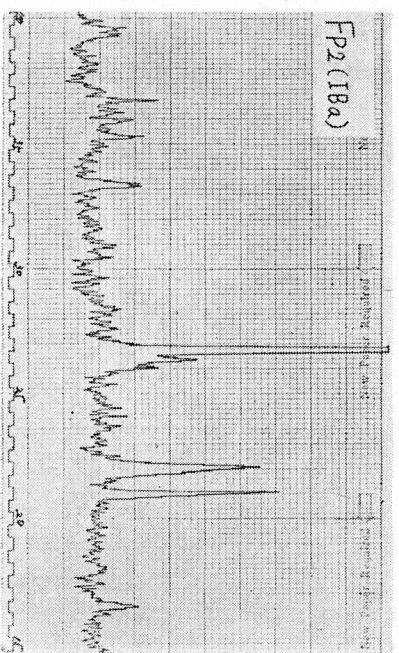
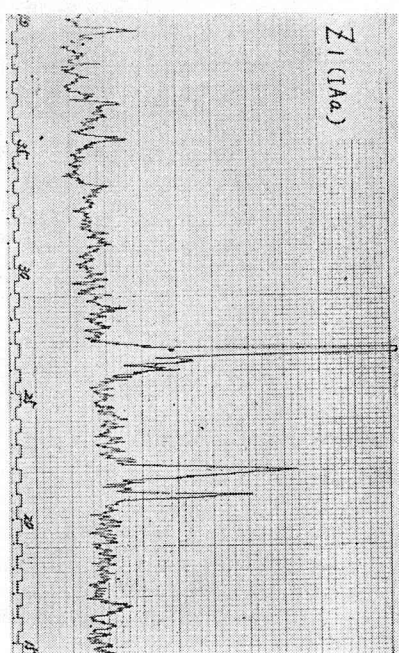
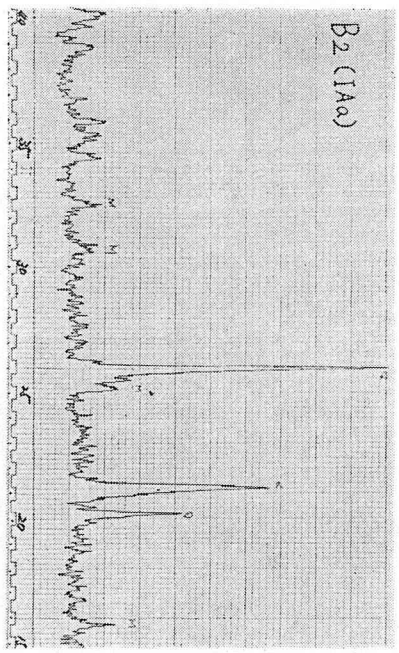
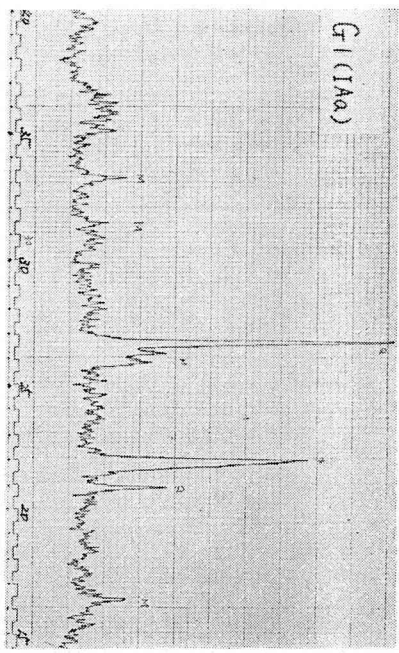
サンプル 記号	出土窯址名称	所在地	備考	サンプル 記号	出土窯址名称	所在地	備考
B 1	ニゴリ池	大阪府和泉市	I 期前	P 2	西 賀 茂	京 都 市	
B 2	〃	〃	〃	P 3	〃	〃	
B 3	〃	〃	〃	Q 1	十瓶山北麓	香 川 県	
C 1	和泉 53 号	〃	〃	R 1	カメヤキ谷	〃	
D 1	和泉 55 号	〃	I 期前 ~中	R 2	〃	〃	
D 2	〃	〃	〃	S 1	今池瓦窯	奈 良 県	
E 1	美木多中山	大阪府堺市	〃				
E 2	〃	〃	〃				
E 3	〃	〃	〃				
F 1	狐 山		〃				
F 2	〃		〃				
G 1	大野池西(A)	大阪府和泉市	I 期前				
G 2	〃	〃	〃				
G 3	〃	〃	〃				
H 1	光 明 池 D	〃	I 期後				
I 1	上 代	〃	III 期前				
I 2	〃	〃	〃				
J 1	八 田 5 号	大阪府堺市	III 期後 ~IV				
J 2	〃	〃	〃				
K 2	美木多46号	〃	〃				
K 3	〃	〃	〃				
L 1	和泉 1 号	大阪府和泉市	V 期				
L 2	〃	〃	〃				
M 1	梨 本 D 号	〃	〃				
M 2	〃	〃	〃				
M 3	〃	〃	〃				
N 1	光 明 池 B	大阪府堺市	V 期後				
O 1	城 ケ 谷	福 井 県					
O 2	〃	〃					
O 3	〃	〃					
P 1	西 賀 茂	京 都 市					
				サンプル 記号	出土遺跡名称	所在地	備考
				T 1	平林古墳	奈良県当麻町	
				U 1	岸野古墳	〃 御所市	
				V 1	新沢112号墳	〃 橿原市	
				W 1	烏土塚	〃 平群町	
				X 1	狐 塚	〃 大和郡山市(小泉)	
				Y 1	烏屋遺跡	〃 橿原市	
				Z 1	下明寺遺跡	〃 〃	
				AP1	飛鳥宮址	〃 明日香村	
				AP2	〃	〃 〃	
				AP3	〃	〃 〃	
				FP1	藤原宮址	〃 橿原市	
				FP2	〃	〃 〃	
				FP3	〃	〃 〃	
				JJ5	多摩ニュー ンタウン	東京都多摩ニ ュータウン	縄文諸磯 B 〃 加曾利 B II 〃 安 行 III・IV
				JJ8	〃	〃	
				JJ10	下 原	神奈川県川崎市	
				GKD1A		北 部 マ ラ ヤ	
				GKD-3		〃	
				GKD-11		〃	

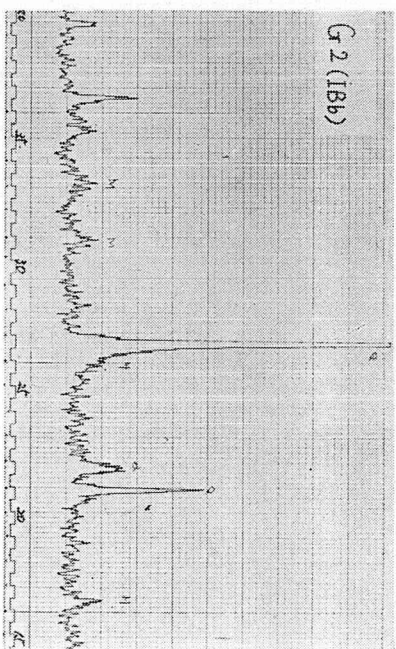
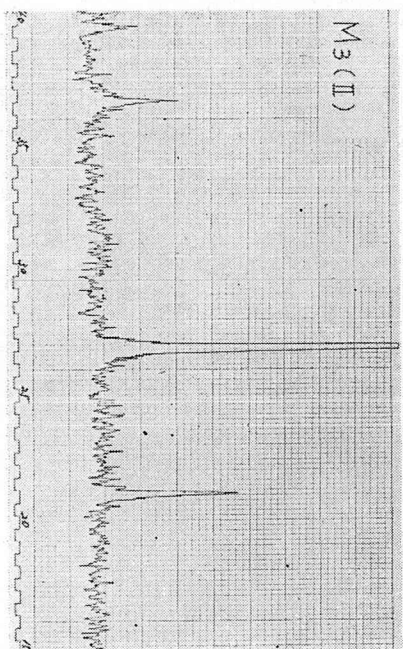
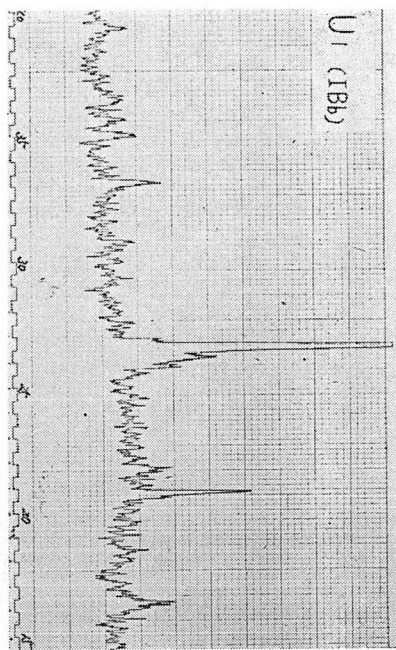
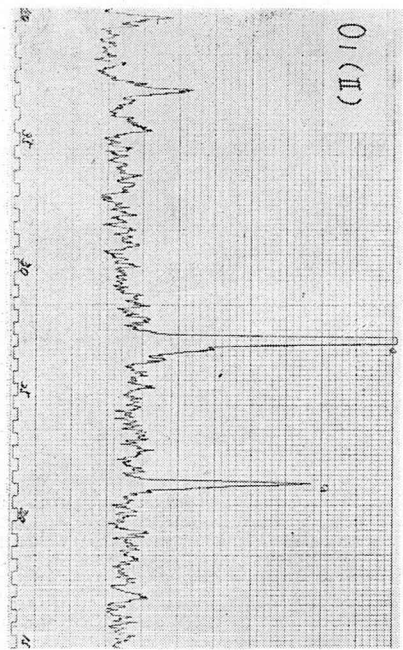
第2表 分析結果一覽表

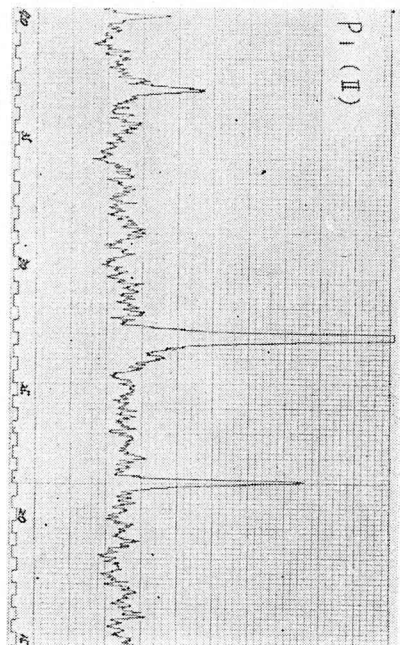
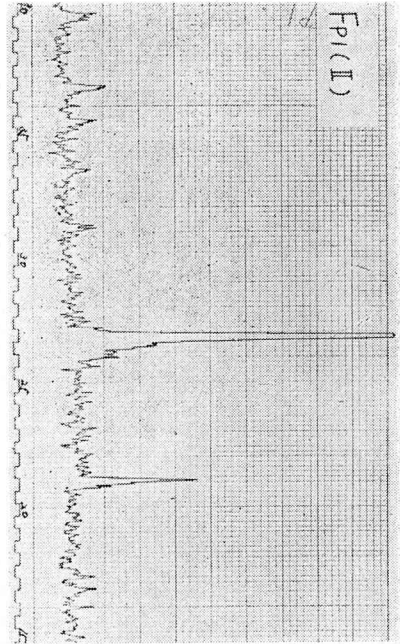
I 群* (α -クリストバ ライトのピーク ($^{ab}_{22^\circ}$)の見られ るもの)	大阪府南部の窯址出土 のサンプル	B 1 B 2 B 3 C 1 D 1 D 2 E 1 E 2 E 3 F 1 F 2 G 1 G 2 G 3 H 1 I 1 I 2 J 1 J 2 K 2 K 3 L 1 L 2 M 1 N 1
	他地方の窯址出土のサ ンプル	Q 1 R 1 S 1
	奈良県の古墳 etc. 出土 のサンプル	T 1 U 1 V 1 W 1 X 1 Y 1 Z 1 AP1 AP2 AP3 FP2
II 群 (α -クリストバ ライトのピーク ($^{ab}_{22^\circ}$)の見られ ないもの)	大阪府南部窯址出土	M 2 M 3
	他地方の窯址出土	O 1 O 2 O 3 P 1 P 2 P 3 R 2
	奈良県の古墳 etc. 出土	FP1 FP3
I A (α -クリストバ ライトのピーク ($^{ab}_{22^\circ}$)が石英の ピーク($^{ab}_{21^\circ}$)よ り高いもの)	大阪府南部窯址出土	B 1 B 2 B 3 C 1 E 3 F 1 F 2 G 1 I 1 J 1 J 2 K 3 L 1 N 1
	他地方の窯址出土	Q 1 R 1
	奈良県の古墳 etc. 出土	T 1 W 1 X 1 Y 1 Z 1 AP3
* I Aa (α -cris のピーク ≥ 5)	大阪府南部窯址出土	B 1 B 2 B 3 C 1 E 3 F 1 F 2 G 1 I 1 J 1 J 2 K 3 L 1 N 2
	他地方の窯址出土	
	奈良県の古墳 etc. 出土	T 1 W 1 Y 1 Z 1 AP3
I Ab (α -cris のピーク < 5)	大阪府南部窯址出土	
	他地方の窯址出土	Q 1 R 1
	奈良県の古墳 etc. 出土	
I B (α -クリストバ ライトのピーク ($^{ab}_{22^\circ}$)が石英の ピーク($^{ab}_{21^\circ}$)よ り低いもの)	大阪府南部窯址出土	D 1 D 2 (E 1)(E 2)(G 2)(G 3) H 1 (I 2) (K 2)(L 2) M 1
	他地方の窯址出土	S 1
	奈良県の古墳 etc. 出土	U 1 V 1 AP 1 AP 2 FP 2
I Ba (α -cris のピーク ≥ 5)	大阪府南部窯址出土	
	他地方の窯址出土	
	奈良県の古墳 etc. 出土	FP2
I Bb (α -cris のピーク < 5)	大阪府南部窯址出土	D 1 D 2 (E 1)(E 2)(G 2)(G 3) H 1 (I 2)(K 2)(K 2) M 1
	他地方の窯址出土	S 1
	奈良県の古墳 etc. 出土	U 1 V 1 AP 1 AP 2

(ただし I B 及び I Bb 中の () 内のサンプルは I A 及び I Aa に含まれる可能性のあるもの)

使用器具—東京芝浦電気 X 線回折装置 (ADG 型銅ターゲット) 電圧 30KV 電流 15mA 感度 C $\times 100$ C
PS 記録計 time constant point 2 記録紙 20 mm/m.







式的な窯址の試料を選び、できる限り一ヶ所に集中するの

を避けて範囲を広めた。加えて窯址側試料として京都・福

井・香川・奈良の窯址側試料をも分析したが、これは大阪

南部窯址群の試料とどれだけ異なる結果を示すかを知るた

めである。次に表に示した如く古墳・集落遺跡・宮址出土

の試料を分析したが、これらは需要地側の遺物であり産地

分析の対象になる^(註)。今回は奈良県の諸遺跡から出土した須

恵器の内入手可能でかつ他の型式学的研究などには役立

ち難い破片に限った^(註)。奈良県の試料が数量・出土箇所とも

に少なく地域内にもやや南半部に偏在するのは前記の制約

によるものである。

従って今回の分析では主として大阪南部窯址群出土の須

恵器の成分と、奈良県の各遺跡出土のそれとが如何なる相

違もしくは合致を有しているかが中心になる。

二 分析の結果

分析の方法として採用した二方法のうち熱ルミネセン

スによる分析の結果からは、同窯出土の須恵器は同じよう

な結果を示すということの他に二、三のことが推察される。

しかし現段階ではデータ分析が不充分で結論的なものを導

き出すことはできなかった。従ってここでは一応、X線回

折による結果の大略を記すことにする。

X線回折によって得られたデータの一部は図として呈したが、回折によって各含有鉱物のピークが示される。これらのピークの内で石英・ムライト・ α -ークリストバライトが一〇度から四〇度の間では顕著である。しかし石英の示すいくつかのピークやムライトのそれは、いずれに於ても見られ参考とした関東地方の縄文式土器にも見られる。また先述の梅田・田窪の報告とも合致する。ムライトの各ピークの内で一六度付近に見られるピークは各試料によって異なり、石英とムライトの内での判定に使用できそうなのはこの一六度付近のムライトのピークのみである。しかし各試料間で最も種々の相違を見せるのは二二度付近にピークが示される石英の一変態の α -ークリストバライトである。そこで私はX線回折で得られた各含有鉱物のピークのうちで特にこの α -ークリストバライトを指標として考える。この α -ークリストバライトは高温になるにつれ増加するが、須恵器焼成温度は約一一〇〇度C以上であることが明らかであり、窯内での位置や薪炭の質などによる焼成失敗例を除けば、焼成温度が各地方の窯によって極端な差を有すると

いうことは考えられない。しかも今回の分析によって、たとえ色質などの外見上の特色から明らかに焼成温度が極めて低いと考えられる焼成失敗例でも、ピークの強度は低い α -ークリストバライトのピークが認められることが判明した。それ故、この α -ークリストバライトのピークの有無は焼成温度の高低によるといふより、原料粘土の相違によるものである。従って産地分析の主たる指標として α -ークリストバライトの有無をとりあげてもよい。

(一) 窯址出土の試料について X線回折によって判明した

α -ークリストバライト(二二度付近のピーク)の有無は表に示した。ピークの見られる試料はI群に、見られない試料はII群にまとめた。これによると大阪南部窯址群出土の試料は、最も谷奥部の梨本D号窯(M)の二試料以外は全てI群に含まれることがわかる。対して他地方の窯址出土の試料の内ではI群に含まれるものは香川県十瓶山北麓・同カメヤキ谷・奈良県今池瓦窯の三例のみで、京都市西賀茂や福井県城ヶ谷の試料は全てII群に含まれることが判明した。次に私はI群も、二二度付近の石英のピークと比較することによって細分した。ピークの強度は絶対的なものではな

いが一応の目安にはなろう。即ち α -ークリストバライトのピークが石英のピークより高いものをIA、低いものをIBとして、さらにIAの内でも α -ークリストバライトが五以上の強いピークのことをIA α 、以下をIABとして、IBについても同様にIBAとIBBに分けた。結果は表に示した通りであるが、香川県の二例は全てIABに属するのに対して大阪南部窯址群の試料は前記の梨本D号窯以外は全てIA α とIBBの二タイプに分類される。IBBの内には外見

上から焼成に失敗したと考えられる試料が数例含まれるが、これらほもし適当な焼成温度を受けて正しく焼成されればIA α タイプになる可能性がある。また奈良県今池瓦窯の試料(S α)も同様にIBBタイプに属するが、須恵器片中に白色結晶が多く含まれることが実見でき、他の外見的特徴からも大阪南部窯址群のものとは区別されるべきものである。

(四) 奈良県の各遺跡の試料について 奈良県の各遺跡出土の試料についても石英・ムライトのピークは全てに於て見られる。また表に示したように α -ークリストバライトについては試料の殆んどがI群に含まれ、大阪南部窯址群の試

料と同様に、藤原宮址の三試料(F α)以外は全てIA α とIBBの二タイプに属することが確かめられた。しかしこの場合IBBタイプに属する試料中に、焼成に失敗したと考えられる例のないことは完成品を使用する需要者側の遺跡出土のものである以上当然であり、IA α に属するかもしれないと予想されるIBBの試料はない。

三 須恵器の需給関係——分析結果からの考察——

分析結果で最も注目されることは、大阪南部窯址群出土の須恵器は他の京都などの窯址出土のものとは異なり、二度付近に α -ークリストバライトのピークが示されることである。東部の高蔵寺・陶器山地区の須恵器にも α -ークリストバライトの含まれることが報告されている。⁽¹⁵¹⁾従って谷奥部の二試料を除けば、 α -ークリストバライトは大阪南部窯址群で生産された須恵器の共通した特徴であるということが出来る。香川県の試料や徳島県日出遺跡出土の須恵器は、 α -ークリストバライトを含むがIABタイプに属したり一六度付近にムライトのピークが見られないという点などで区別することができる。⁽¹⁵²⁾

以上の事実を考慮に入れて、大阪南部窯址群と奈良県の

各遺跡の試料分析結果を比較すると、両者が極めて類似していることが注目される。即ち奈良県の平林古墳・鳥土塚・小泉狐塚・鳥屋遺跡・下明寺遺跡・飛鳥宮址(一邨)の試料は Iaa タイプで、同じ Iaa タイプの大阪南部窯址群のものとはあらゆる点で極めて類似した結果を示す。さらに Ibb タイプの奈良県の岸野古墳・新沢一一二号墳・飛鳥宮址(一部)の試料も同タイプの大阪南部窯址群のそれと同様の結果を示している。従って奈良県の古墳その他のいわば需要者側の遺跡で発見される須恵器の大部分は、大阪南部窯址群で生産された可能性が強い。もっともこのことは Iaa タイプでは特に可能性が強いが、Ibb タイプではさらに検討の余地があることを含んでおかねばならない。ところで奈良県の須恵器の内、いわゆる古墳時代の殆んどが大阪南部窯址群型であるのに対し、時代の下った飛鳥・藤原宮址の試料は Iaa・Ibb・II 群などにわかれる。このことは六世紀以降各地方に須恵器生産が普及し七世紀以降には全国各地から須恵器を貢納させたことを物語るものと理解したい。それ故、両宮址のみならず平城宮址などの須恵器も大阪南部窯址群以外の地からも送られたと予想

される。この際、平城宮址から出土する須恵器中に外見上の特色から愛知県猿投山窯址群で生産されたと推定される例が存在することが注目されるが、これについては他日に分析を期したい。

いずれにせよ須恵器の面でも大需要地であった奈良県には大規模な須恵器窯址群は存在せず、その需要を満たすために特に大阪南部の大窯業地域の供給によったことは、今回の分析結果によってほぼ断定し得るであろう。それ故、

大阪南部窯址群がほぼ畿内全域を対象としていたろうとする考古学分野での見解も、今回の分析によって少なくとも

奈良県については実証されたと考える。さらにこの際、両

地域を結ぶ交通路として既に藤岡謙二郎・岸俊男・足利健亮・千田稔などによって検証された丹比道と大津道が注目

される。窯址群の位置からいえば丹比道の方が有利であるが、大津道の方には須恵器運搬に利用し得る大和川水運という長所があり、両者いずれとも決し難い。

次に窯址側に限って分析結果を考察すれば、大阪南部窯址群の内 Ibb タイプに属するものが正しく焼成されれば Iaa タイプに属すると仮定すると同一の窯址から出土

した須恵器は互いに相似た性質を有することが多い。それ故に現段階では原料粘土については少なくとも個々の窯に關する限りある特定の採取地を有していたと考えるべきである。また愛知県(28)の窯址群に於ける原料粘土の分析結果などをあわせ考えると、関東地方の縄文式土器や北部マラヤの土器とは異なり、須恵器の場合は原料粘土をかなり吟味して選択・採取していることも判明した。(29)

今回の分析についての詳細は紙数の關係上以上の如く極く概略を述べるにとどめたが、試料数を増したりしてさらに精密な検討を加えねばならない。他の化学的分析方法を併用することも必要であろう。しかし従来ともすれば、色や質・文様などのみで判断しがちであった土器の産地分析の方法として、本論で呈示したX線回折による方法が有効であることは認められよう。須恵器は非常に数多く発見され、窯址の遺跡も明確で産地分析の対象としては適している。その須恵器の需給關係を明らかにすることは古墳時代から律令時代に至る諸勢力の実態を解明する上での有効な手段となり得る。ひいてはそれが単に窯業地域を把握した権力のみならず、古代に於ける領域を考察する上でも重要

な指標となるであろう。私が窯業地域内部の考察に加えて須恵器の需給關係を明らかにするための産地分析を試みたのは、まさにこの観点に立脚したからに他ならない。それ故まだ予察的な段階を出ないが、可能性を含んだ一方法として、今回の分析結果を提しておきたい。

む す び

本稿では古代手工業を歴史地理学的に考察することを目指した。そこで手工業に關連する地名から説き起こしたが、その地名が果たして手工業者集団によって成立したかわば手工業村落を表現するものか否かについては、疑問の点が非常に多い。たとえば国府・郡家などの政治的中心や交通・帰化人との關連に於て論ずる必要があるにせよ、本論で敢て深入りしなかったのは対象とする手工業関係地名の実態を把握し得なかつたためである。しかしその中でも考古学的研究の進んだ窯業遺跡などは地名と結びつけて論じ得ることは既に述べた通りであり、とりわけ須恵器窯址群は古代に於て大きな意味を有したという点などから充分論ずるに値する対象であると考えられる。私はさらに土師地名や

瓦窯についても論及したが、これは古墳群や律令時代の寺院・帝都などとの有機的な結合を解明したいと考えたからである。古墳群地帯と土師地名・埴輪製作集落がひとつのまとまりとしてとらえられることは古市菅田古墳群に於て論述した。また奈良県の諸大寺には付属の瓦屋が寺域に近接して設置され、宮都造営のためには近接した丘陵地帯が瓦製作地帯として改変される様相が見られた。しかし中には五条市の窯址群のような例もあったが、いずれにせよ丘陵地帯に立地した瓦窯や須恵器窯の主たる対象は平野部の豪族や律令的権力の所在地であった。ここで私はその自然的条件や工人集団居住地について考察を加えたが、古代に於て、政治的中心や農業の地として重要であった平野部の他にも、少なくとも窯業立地によって、従来看過されがちであった平野周縁の丘陵地帯もまた古代人の生産の場としての意味を持ったことを強調しておきたい。他の紡織関係地名などが窯業とは異なって、さしたる地形的条件などの制約を受けない故にむしろ平野部に多く分布するのは好対照であるといひ得る。窯業地域内部の諸問題と共に、私

が前章で試みた須恵器の需要関係を明らかにし得た時、はじめて古代の丘陵地帯と平野部の結びつきが分明になるであろう。以上の展望を有し、その手懸の一端として拙論を提したいと思う。

- ① 古代に於て手工業という概念があったか否かについては検討を必要とするが、本稿では便宜上古代手工業の語を使用する。
- ② たとえば藤岡謙二郎や小野忠熙の業績が注目される。
- ③ 喜田貞吉が『民族と歴史』二巻一号に部落問題を特輯し、同二巻二号に川上多助が「品部雑戸考」を発表したことを指す。
- ④ 植松考穆「律令制に於ける品部雑戸の由来と大化改新」(『史観』一九)では和銅六年から養老五年の間、青木和夫「雇役制の成立」(『史学雑誌』六七ノ三)では、和銅六年から靈龜二年の間、上田正昭「品部雑戸の展開過程」(『部落問題研究』三)では、天平一〇年以前という諸説があり、さらに、滝川政次郎は『令集解釈』(一九三二)では別記は大宝令の付属法令であるとし、前記三氏も賛意を表している。
- ⑤ 狩野久「品部雑戸制の再検討」(『史料』四三ノ六、一九六〇年)
- ⑥ 高橋富雄「品部雑戸の基礎構造」(『史学雑誌』)
- ⑦ 尾尾猛市郎「品部と雑戸の差異について」(京大説史会『国史論集』)
- ⑧ 坂本太郎「古代における雑色人の意義について」(坂本『日本古代史の基礎的研究』(下) 制度編 所収、一九六四)
- ⑨ 太田亮『日本上代社会組織の研究』(一九五五) 第二編「部」、二二七～二四五頁。
- ⑩ 平野邦雄「大化前代社会組織の研究」(一九六九) 第三編「品部と雑戸」、一四三～二一九頁。
- ⑪ 樋口清之『日本古代産業史』(一九四三)

⑨ 遠藤元男『日本職人史の研究(論集編)』(一九六一)

⑩ 石母田正「日本古代における分業の問題——一つの予備的考察——」(石母田他編『古代史講座九』所収、一九六四)

⑪ 八木充『律令国家成立過程の研究』(一九六八)、三九〇―六三頁。

⑫ 岩橋小弥太『上代官職制度の研究』(一九六二)

⑬ 渡辺実『未解放部落史の研究』(一九六五)の中で未解放部落の萌芽は既に古代の品部・雑戸に於て形成されていたと論じられる。しかしこれについてはより精密な検討が必要であり、速断は慎しむべきであろう。

⑭ 狩野久 前掲注⑤

⑮ 直木孝次郎「古代国家と村落——計画村落の視角から——」(『ヒストリア』一九六五)

⑯ 林屋辰三郎「部民制の成立」(『日本古代史論叢』所収、一九六〇)

⑰ 門脇禎二『日本古代共同体の研究』(一九六〇)第六章。

⑱ 小林行雄『古代の技術』(一九六二)、『続古代の技術』(一九六四)

また外国に於ける古代の諸技術を扱ったものとしてたとえば、R. J. Forbes: *Studies in Ancient Technology*, Vol. I-VII (1964-1966)がある。

⑲ たとえば、夏見台學術調査所編『夏見台—古墳時代集落跡—工房跡の発掘調査』や、木代修一「平城京に於ける工房について」、『史潮』四—三)があげられ、また、大川清他『岩手県江刺市瀬谷子窯跡群緊急調査概報』(一九六九、一九七〇)では特に窯址のみでなく土器製作の工房址に触れているのが注目される。

⑳ Charles Singer, E. J. Holmyard and A. R. Hall: *A History of Technology*, Vol. I (1954, Oxford) Pottery, pp. 376-412 (by the late Sir Lindsay Scott).

㉑ A. Lucas: *Ancient in Egyptian Materials and Industries* (1962).

— 1st, 1926 — London) Chapter XV-Pottery, pp. 367-385.

㉒ 大川清「古窯跡研究上の問題点」(『考古学ジャーナル』一九六七年一月号)

大川・坂詰「古代窯跡の形態」(『考古学雑誌』五二—四、一九六七)

㉓ 坂詰秀一「須惠器の窯跡」(『国際文化』一九六三年一月号)、『日本の古代窯業』(『歴史教育』一四—三号—六号、一九六六)

㉔ 橋崎彰一「須惠器」(石母田他編『古代史講座九』所収、一九六三)

「古代末期の窯業生産」(『日本史研究』七九号、一九六五)

㉕ 倉田芳郎「須惠器」(大場英雄他監修『新版考古学講座五』所収、一九七〇)

㉖ 森浩一「和泉河内窯の須惠器編年」(『世界陶磁全集第一集』所収、一九五八)

㉗ 他に参考としたものは、石川恒太郎「須惠窯址考」(『考古学雑誌』三四—六、一九四四)、小山富士夫「須惠器の窯址」(『考古学雑誌』三九—三、四合併号、一九五四)などがあるが、窯業関係の文献目録としては、斎藤忠『日本古代遺跡の研究』(一九六八)が詳しい。

㉘ 鏡味完二「品部・名代・子代・部民・屯倉・田荘の地名——古代前期の地名研究——」(『地理学評論』二七—一、一九五四)

㉙ 池田末期「古代地名語構成論」(『奈良文化論叢』所収、一九六七)

㉚ 古代手工業を一般的に論じたものとしては他に、豊田武編『体系日本史叢書一〇 産業史一』(一九六四)の内森浩一「生産用具の製作」(七三—一八頁)と、平野邦雄「生産の組織」(二一九—二七頁)を参照した。

さらに古代手工業に於て重要な役割を果たした職業部などの関係史料は、部落問題研究所編『部落史に関する総合的研究 史料第一・第二』(一九五六)に網羅されている。従って本稿作成に際して史料集としては本書を参照した。

- ⑤① 前掲注②・②⑨
- ⑤② 江里口隆信「品部考(上・下)」(『史泉』一二・一三三号、一九五八)
- ⑤③ 現大阪府池田市の服部・呉服神社、高槻市の服部、奈良県斑鳩町の服部、大阪府八尾市の服部川などの地名が注目される。
- ⑤④ 前掲注②の平野郡雄執筆分。
- ⑤⑤ 関晃『婦化人』(日本歴史新書、一九六六)
- ⑤⑥ 太田亮『日本古代史新研究』(一九二八)三二九頁。
- ⑤⑦ 寺村光晴『古代玉作の研究』(一九六五)
- この成果からも理解されるように、玉作関係の地名・神社名・人名と玉作遺跡が合致することからも、須恵地名その他の地名についても遺跡と合致する場合はその地名が古代に於て意味を有したことを認めるべきであろう。
- ⑤⑧ 江里口 前掲注②
- ⑤⑨ 岸俊男「紀氏に関する一私考」(岸『日本古代政治史研究』所収、一九六六)
- ⑤⑩ 吉田東伍『大日本地名辞書』(一九〇七)二七八頁。
- ⑤⑪ 樋口清之・松本俊吉(『大三輪町史』、一九五九)九〇三・六四〇七〇・五六八〇五八三頁。
- ⑤⑫ 前掲注②の他に、堀内民一『万葉大和風土記』(一九四三)、米田理八『海柘榴市に就いて』(『磯城』二二、一九三九)
- ⑤⑬ 藤岡謙二郎『国府』(一九六九)
- たとえば周防の鍛冶屋、参河の鍛冶ヶ谷、但馬の工田など。
- ⑤⑭ 以上に関して集めた関係地名は全国にわたる大字以上の地名(一部は小字地名)であり、『大和地名大辞典』(一九五二)、『京都府字名台帳』(京都府庁地方課所蔵、一九七〇)の他に、池田末則氏所蔵『地名索引』(一九四二、一九四三)の全国分を参照させて頂いた。
- ⑤⑮ 直末孝次郎「土師氏の研究」(『人文研究』一一一九、一九六〇)
- ⑤⑯ 村津弘明「土師氏の研究―律令体制対応以前の様相―」(『史泉』二二、一九六一)
- ⑤⑰ 小島俊次「土師四腹と古墳」(『末永先生古稀記念古代学論叢』所収、一九六七)
- ⑤⑱ 小出義治「大和、河内、和泉の土師氏」(『国史学』五四、一九五二)
- ⑤⑲ 和田萃「殯の基礎的考察」(『史林』五二、一九六九)
- ⑤⑳ 美濃国味蜂郡春部里大宝二年戸籍(戸主土師部在及び宋人部加利口寄人土師荒猪)
- ㉑ 下総国葛飾郡大島郷養老五年戸籍(戸主孔王部志瀨母土土師部刀自亮)
- ㉒ 下総国倉麻郡意布郷養老五年戸籍(藤原部小諸妻土師部與佐亮)
- ㉓ 出雲国天平一年大税賑給歴名帳(日置部臣常石口土師部小龍)
- ㉔ 遠江国浜名郡新居郷天平二年輪租帳(戸主土師部小真木)
- ㉕ 具体的な例は省略するが、古墳群の中にある場合と、各古墳群から互いにやや離れている場合の二つが主である。
- ㉖ 直木 前掲注⑤
- ㉗ 村津 前掲注⑤
- ㉘ 四支族(四腹)とは毛受腹・菅原氏・秋篠氏と他の一支族のことである。
- ㉙ 直木 前掲注⑤
- ㉚ 小出 前掲注⑤
- ㉛ 小島 前掲注⑤
- ㉜ 前掲⑤の小出義治が、立部字土師に現在土師氏を称するものが三〇戸あることを述べ、さらに宝永二年の丹比郷立部村明細帳に土器製作のことが記されているのを報告しているのは注目される。
- ㉝ 吉田東伍 前掲注⑤ 三三〇・三三四頁。


- ⑤⑦ 朝日新聞(一九七〇年二月二〇日付)紙上で紹介されている。さらに、大阪府水道部刊『大阪府南河内郡美陵町藤の森・著上山二古墳の調査』(一九六五)がある。
- ⑤⑧ 藤岡 前掲注④ 一六四頁。
- ⑤⑨ 内務省『特選神名牒』(一九二五)、四九〇頁。
- ⑥① 浜岡賢太郎他「古代中世における手工業の発達 窯業(北陸)」(『日本の考古学Ⅴ』所収、一九六七)、一七六頁。
- ⑥② 檜崎彰一他「窯業(東海)」(『日本の考古学Ⅴ』所収、一九六七)、一三二頁。
- ⑥③ 本多静雄「愛知県猿投山西南麓の古窯址群」(『陶説』二四、一九五五)。
- ⑥④ 愛知県教育委員会『愛知県猿投山西南麓古窯址群』(一九五六～一九五九)、『愛知県知多古窯址群』(一九六〇～一九六二)。
- ⑥⑤ 前掲注⑥①『日本の考古学Ⅴ』、一三三頁。
- ⑥⑥ 前掲注⑥②『日本の考古学Ⅴ』、一三四頁。
- ⑥⑦ 鎌木義昌他「窯業(瀬戸内)」(『日本の考古学Ⅴ』所収、一九六七)、二一八、二一九頁。
- ⑥⑧ 前掲注⑥③ 二一八頁。
- ⑥⑨ 六車恵一「窯業(七四国)」(『日本の考古学Ⅴ』所収、一九六七)、二四一頁。
- ⑦① 『考古学ジャーナル』四三(一九七〇年四月)の「考古ニュース」
- ⑦② 藤岡 前掲注④ 二二七・二三八頁。
- ⑦③ 前掲注⑥⑤
- ⑦④ 小山 前掲注⑦②。
- ⑦⑤ 松沢勲他「猿投山南西部地域の地質―特に陶器原料粘土の地質」(前掲注⑥①『愛知県知多古窯址群』所収、一九六〇)
- ⑦⑥ 同志社大学森浩一氏の教示による。
- ⑦⑦ 檜崎 前掲注⑤、狩野 前掲注⑤
- ⑦⑧ 檜崎 前掲注④
- ⑦⑨ 狩野 前掲注⑤
- ⑧① 伊達宗泰・森浩一「土器」(『日本の考古学Ⅴ』所収、一九六六)、二〇一頁。
- ⑧② 他には大阪府北部窯址群や京都市山科付近の窯址群などがあるが、いずれも小規模である。
- ⑧③ 田中琢「窯業(畿内)」(『日本の考古学Ⅴ』所収、一九六七)、二〇三頁。
- ⑧④ 和泉市『和泉市史 第一巻』(一九六五)
- ⑧⑤ 内務省 前掲注⑤⑨ 一二六頁。
- ⑧⑥ 森 前掲注④
- ⑧⑦ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(一九六六)
- ⑧⑧ 藤岡謙二郎他「枚方の自然と景観」(『枚方市史 第一巻』所収、一九六七)、三～二二頁。
- ⑧⑨ 地学団体研究会『日本の第四系』(一九六八)、三三四～三三七頁。
- ⑧⑩ 田辺 前掲注④
- ⑧⑪ 田辺 前掲注④
- ⑧⑫ 京都大学理学部石田志朗氏の教示による。
- ⑧⑬ 三渡俊一郎「古窯の熱的考察」(『私たちの考古学』五一(一九八)、一九五八)
- ⑧⑭ 田辺 前掲注④
- ⑧⑮ 光明池などの溜池は新しく、古代に於て現在見る程の池があったとは考えられない。しかし図上には現在の主な池を示し、便宜上、地区に分ける際もこれらの池の名称を使用した。
- ⑧⑯ 倉田 前掲注④
- ⑧⑰ 田辺 前掲注④
- ⑧⑱ 田辺 前掲注④
- ⑧⑲ 田辺 前掲注④

- ⑨② 大阪府教育委員会『和泉光明池地区窯跡群発掘調査概報』（一九六七）
- ⑨③ 森 前掲注②
- 森浩一「飯蛸壺形土器と須恵器生産の問題」（榎原考古学研究所編『近畿古文化論叢』所収、一九六三）
- ⑨④ 窯址分布図作成と個別的な時期については、森浩一氏及び辻川陽一氏の教示によった。
- ⑨⑤ 田辺 前掲注①
- ⑨⑥ 伊達・森 前掲注②
- 横山浩一「土器生産」（『日本の考古学Ⅴ』所収、一九六〇、六五頁）
- ⑨⑦ 倉田 前掲注②
- ⑨⑧ 横山 前掲注② 六五頁。
- ⑨⑨ 三渡俊一郎「古窯の操業期間の考察」（『考古学研究』九一三〔三五〕、一九六二）では、黒笹九〇号窯の灰原の皿から焼成は数十回を下ることはなかったとし、年数回の焼成回数として操業期間は一〇年前後とする。また氏は奈良・平安朝様式の窯については約九年と推定している。
- これに対して、坂詰秀一「古窯の操業期間の問題」（『考古学研究』一〇一三〔三九〕、一九六三）では、奈良・平安時代の窯址について山形県の例は長くても三年、武蔵国分寺の窯場は五、六年と推定する。
- しかし両者いずれにせよ、一基の窯が普通五、一〇年は操業された可能性が強く、五〇基以上の各時期にわたる大窯址群たる大阪南部窯業地域に、工人が多く集団を成して居住していたことは疑問の余地がない。
- ⑩ 田辺 前掲注②
- (101) 久永春男・山村宏「大沢・川尻古窯跡調査報告書」（一九六〇）
- (102) 森 前掲注②
- (103) 大阪府群が農業には極めて不適であることは岡高明によって証明されている。（『朝日新聞』一九七〇年六月二日付）。
- (104) 横山 前掲注② 六九頁。
- (105) 伊達・森 前掲注② 二〇三頁。
- (106) 岸熊吉「大和に於ける古代窯跡」（『奈良県抄報』一一、一九五九）。
- (107) 小島俊次「奈良県の考古学」（一九六五、三一―三三三頁）。
- (108) 岸熊吉 前掲注(106)。
- 小島 前掲注(107) 三三三―三四頁。
- (109) 網千善教「高市郡飛鳥村飛鳥瓦窯跡」（『奈良県抄報』五、一九五五）。
- (110) 奈良国立文化財研究所「飛鳥寺発掘調査報告」（一九五八）。
- (111) 小林 前掲注②続編、三〇三頁。
- (112) 五条市史調査委員会「五条市史」（一九五八）でも現在この地に瓦製造業者が多いことを記述している。
- (113) 岸俊男「古道の歴史」（『近代の日本』近畿）所収、一九七〇）。
- (114) 網千 前掲注(109)。
- (115) 岸熊吉 前掲注(106)。
- (116) 網千善教「北葛城郡下牧瓦窯跡」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』一五、一九六二）
- (117) 堀池春峰「造東大寺司瓦屋と興福寺瓦窯址」（『日本歴史』一九七、一九六四）。
- (118) 岩城隆利「法興寺から元興寺へ」（古代学協会『西田先生頌寿記念・日本古代史論叢』所収、一九六〇）。
- (119) 堀池 前掲注(117)も瓦堂を指摘している。

- (120) 貞享四(一六八七)年。
 (121) 享保二〇(一七三五)年。
 (122) 奈良教育委員会『都祁村吐山池ノ谷一号墳 奈良市登大路町の瓦窯 発掘調査概要』(一九七〇)。
 (123) 堀池 前掲注(117)
 (124) 小島 前掲注(107)
 (125) 福山敏男「奈良時代に於ける法華寺の造営」(『日本建築史の研究』所収、一九四三)。
 (126) 網干善教「橿原市飛騨町日高山瓦窯跡」(『奈良県文化財調査報告』五、一九六一)。
 (127) 奈良県教育委員会『藤原宮』(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』二五、一九六九、二二八～二三三、四九～六五頁)。
 (128) 奈良県文化財保存課久野邦雄氏の教示による。
 (129) 奈良国立文化財研究所『平成宮発掘調査報告Ⅱ—官衙地域の調査—』(一九六二)、九〇頁。
 (130) 堀井甚一郎『奈良県地誌』(一九六二)、三一～三八頁。
 (131) 足利健亮「恭仁京の歴史地理学的研究 第一報—現景観の観察・測定にともづく朝堂院・内裏・宮城および右京「作り道」考—」(『史林』五二一三、一九六九)。
 (132) 堀井 前掲注(130)、三一～三八頁。
 (133) 伊達宗泰「特殊遺跡の地理学的考察」(『奈良文化論叢』所収、一九六七)。
 (134) しかし奈良県教育委員会『藤原宮跡出土木簡概報』(一九六八)などでは木簡によって古代手工業製品の移動を確かめ得る例は少い。
 (135) 近年新しく発行された『考古学と自然科学』一号・二号(一九六八・一九六九)などがその好例である。
 (136) 東村武信「考古学への自然科学的方法の応用の現状—産地分析

- を中心として」(『考古学と自然科学』一、一九六八)
 A. Wyrtenbach and H. Hermann (Archaeometry 9 139, 1966).
 (137) 東村 前掲注(136)中、E. E. Richard and K. F. Hartley (Nature 185 194, 1960), E. E. Richard (Archaeometry 3 25, 1960), H. W. Catling 他 (Archaeometry 4 1, 1961), A. A. Gordus (Archaeometry 10 87, 1967) などの業績が紹介されている。
 (138) 今回の分析に当たっては、奈良教育大物理学研究室の市川米太氏の指導と多大な協力を得た。
 (139) 大部分の鉱物は加熱されたとき白熱する以前の温度で燐光を発輝する。この熱ルミネッセンスの現象を利用して測定する方法が熱ルミネッセンス法である。
 今回は試料を粉碎し四ニメッシュ～二〇〇メッシュの粉を水洗い及び超音波でオッシングした後、セパレーターで白色鉱物と着色鉱物に分離した。さらにこの白色鉱物を二分し、一方はそのまま、他方には五〇〇Rを照射してその各々を測定した。
 (140) 市川米太「熱ルミネッセンスによる土器の年代測定」(『考古学と自然科学』一、一九六八)などがあるが、その中で、M. J. Aitken 他の業績が紹介されている。
 (141) B. D. Culley (松村源太郎訳)『X線回折要論』(一九六一)。
 (142) 竹岡清「徳島県日出遺跡出土の土器の化学的研究」(『同志社大文学部考古学調査報告第二冊 紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』所収、一九六八)。
 (143) 田窪宏・梅田甲子郎「近畿地方より出土した土器の物理的・化学的諸性質」(『考古学と自然科学』二、一九六九)。
 (144) 山崎一雄「篠岡出土の緑釉および灰釉陶片ならびに鳴海出土の緑釉陶片の化学的研究」(前掲注①)「愛知県知多古窯址群」所収、一九六〇)、「陶器の釉薬および胎土の化学的研究」(『考古学と自然科学

- 学』二、一九六九。
- (145) 今回のX線回折では、試料を粉碎し、その内二〇〇メッシュ以下の粉末をディフラクトメーターによって測定した。
- (146) 田窪・梅田 前掲注(143)。
- (147) 大阪南部窯址群出土の須恵器片は、辻川陽一氏の案内で現地採集したものと同氏から提供頂いたものである。また、他地方の窯址試料は同志社大学森浩一氏、奈良県の各試料は考古博物館伊達宗泰氏に提供願ったものである。
- (148) 今回の分析に要した試料は両方法あわせて約五cm平方の須恵器片で充分であった。その際にも特殊な文様の部分、口縁部や宝珠つまみの部分などは粉碎を避け他の研究の障害とならないように留意した。
- (149) 田窪・梅田 前掲注(143)。
- (150) 三渡 前掲注⑥。
- (151) 田窪・梅田 前掲注(143)。
- (152) 竹岡 前掲注(42)。
- (153) 伊達・森 前掲注⑦ 二〇二頁。
- 田中 前掲注⑦ 二〇三～二〇五頁。
- (154) 田辺昭三「陶邑の変貌」『古代の日本 (近畿)』所収、一九七〇)。
- (155) 藤岡謙二郎『都市と交通路の歴史地理学的研究』(一九六七)、二二七～二四二頁。
- (156) 岸俊男 前掲注(13)。
- (157) 足利健亮「恭仁京の京極および和泉・近江の古道に関する若干の覚え書き」『社会科学論集』創刊号、一九七〇)。
- (158) 千田稔「古代港津の歴史地理学的考察—瀬戸内における港津址比定を中心として—」『史料』五三一、一九七〇)。
- (159) 松沢他 前掲注⑦。
- (160) このことは各種土器のX線回折のデータを比較検討すれば容易にわかる。さらに注(16)で述べた熱ルミネッセンスのために試料の粉末をセパレーターで分離した際に判明したように、縄文土器などよりはるかに須恵器の含む白色鉱物成分が少いことなどからも理解し得る。

(京都大学大学院学生・)

years witnessed so many contributions to this typically medieval system. But feudalism as we understand it is *par excellence* a complex of private contracts between lord and man and an emphasis must also be laid on this side when we describe the feudal development in England though the monarchical power was stronger from the beginning, exerting more or less influences on English feudalism.

Before and after the Norman Conquest the feudal society developed through the endowment of fief, the *Verdinglichung* of feudal contract, and culminated in the status-organized society under the administrative initiatives of the Norman and Angevin kings. At the same time, however, it is important to notice that the full development of such a society tended to be immobilized, till the status consciousness retreated in the turmoil of bastard feudalism in the fourteenth and fifteenth centuries.

Lastly the bastard feudalism with its confusion and unswerving localism was overcome by the constitutional development of the Commons in the same period, especially in the fifteenth century.

Anciens arts et métiers céramiques vus de leur géographie historique

par

S. Takahashi

Il est un dessein principal dans cette article de mettre en lumière les arts et métiers du point de vue géographique, ce qui était souvent laissé passer dans la géographie historique de l'ancien japon.

Quand j'ai pris d'abord un aperçu général sur les lieux des arts et métiers trouvés partout dans le pays, étant appuyé sur les renseignements des disciplines voisines, il était possible de donner quelques exemples du nom de lieu et de l'emplacement des ateliers céramiques dans chaque région où il existe encore leurs ruines et dépouilles.

Concernant une chaîne de ruines au sud d'Osaka, je suppose de déplacement progressif des fourneaux vers le fond de la montagne, à la suite de la recherche sur leur état de diffusion aussi bien que celui de l'éta-

blissement vu par son aspect historique et naturel, et ainsi de même, de l'habitation d'une groupe des artisans céramaiques régulièrement au long de limite entre la montagne et la plaine.

Quant à la briqueterie qui servait à la construction de la cour impériale et du temple à Nara-préfecture, il a fallu savoir où ils se trouvaient donc les briqueteries appartenant au temple du nord dans cette préfecture; j'en ai essayé par la voie toponomique.

Aussi il me permet de voir la géographie commerciale, l'offre et demande de brique fabriqué, mais non dans le cas de *Sueki* porcelaine. Afin d'y arriver à celui-ci, j'ai exploité la méthode scientifique telle que X-rayon diffractive et de thermoluminescence, et de là finalement, j'ai conclu que c'était aux anciens fourreaux au sud d'Osaka que beaucoup de *Sukei* porcelaines déterrés à Nara-préfecture avaient été fabriqués.